
青天の霹靂

桂まゆ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青天の霹靂

【Nコード】

N7973G

【作者名】

桂まゆ

【あらすじ】

田舎道を走るバス。観光、見舞い、帰省…果ては自分探しなど、様々な目的で旅をする乗客が、何かに巻き込まれる。RPG企画小説です。

登場人物紹介

この小説に出てくる九人の主人公たちです。（五〇音順）

朝霞 治 あさが はる 男性。35歳。中肉中背、目は細め。可もなく不可もない容姿。意外と体力はある。

お茶専門店「亜空館」ティーブレンダー（お茶のブレンドする人）。

契約している農家の、新茶（もしくはハーブ）を、じかに見る為に、移動中。

上谷 秋紀 かみや あき 男性。身長178cm。髪、瞳ともに黒。顔は中の上か上の下。

趣味は盆栽。常識が結構ズレている。が、なんかもう達観したと言いか色々諦めている。

霊媒体質で、人形とヨーコと死神と悪霊を引き連れたの旅行中。

白雪 ミコト しらいゆみ みこと 女性。20歳。背中まであるストレートな黒髪に神秘的な黒目。まつげが長い。服装はゴスロリ。

大企業の一人娘。ブタのぬいぐるみを持ち、「おぶたさま」と呼び敬っている。

現在、家出をして許嫁に会いに行く途中。

須藤 隼人 すどう しゆん 男性。25歳。黒髪黒目。身長175cmくらい痩せ型。

アメリカに留学中だったが一時帰国中。性格は、

冷静沈着。

谷川 裕 男性。17歳、高2。身長は160cmほど。ナチュラルブラウンの髪に茶色の瞳。

基本的に引つ込み思案で悩み事なども自分で解決するタイプ。

現在、ひとりで旅行中。

榎木 幸助 男性。26歳。公務員。中性的な顔立ちとヒョロリとした体型。黒瞳黒髪、髪はややワカメ
ややハスキーで女言葉をしゃべるが、“オカマ”
と言われると野太い声でキレル。

現在、新たな恋ともう1人の自分を探す旅に出ている。

氷水 沙弥 女性。22歳（一応学生）。身長160cm。黒髪黒眼。ショートカットにどんぐり眼。

現在、就職活動から逃避しつつ、自分探しの旅に出ている。

日野 美智花 女性。10歳、小5。身長140cm。黒髪黒目、ショート。子供っぽく少しふっくらしている。

現在、祖父の家に遊びに行く途中。保護者がいない初めての旅行にどきどきしている。

陽水 咲季 男性。21歳。職業は花屋の店員。身長166cm。黒髪を首筋辺りまで伸ばす。女顔。華奢。色白。

性格は、朗らかで温和。基本的に優しく、物腰もそこそ。

現在、入院中の母親を見舞うべく、職場で厳選した花束を持ってバスに乗車。

ものすごく、個性溢れるキャラたちですねー。
なお、このキャラクターたちには、「なるつ」作者の誰かが演じています。

さて、物語はどつ流れますやら……。

承前（前書き）

この物語は、なろう作者の方がプレイヤーをつとめるRPG企画の小説です。

試験的な企画ですが、楽しんで描いて行きたいと思います。（まだ、本格的に始まってもないのですが）

承前

のどかな田舎道を、バスはゆつくりと走る。

窓から見える景色は、田圃と山。たまに橋が架かっっていて、その下に涼しげな溪流が見える。この景色は一時間ほど続いている。

時間的には、お昼前ぐらい。初夏の日差しが、すこし車内の温度を上げていた。

運転手が、冷房を少し強くする。

それにしても。と、運転手は思った。

今日は、またずいぶんと風変わりな客が居るな。

バスの終点には二時間ほどのトラッキングコースがあり、それはそれは見事なツツジの景勝地があるのだが、その盛りは先週で終わった。

ゴールデンウィークも終わり、観光客は激減した。

観光バスが減った事は、運転手にとっては嬉しい事だ。終点に行く途中、かなり狭い峠道が展開されており、そこを大型バスが行き交うのは大変だからだ。

だからこそ。

地元の間には見えない客を、ついつい観察してしまう。

例えば後部座席に座るいわくありげな三人組や、ひらひらの服を着たブタのぬいぐるみを抱えた女の子。旅行者という感じには見えない。

三人組の真ん中に座る男は何故か料金表を睨み付けている。ちょっと怖い。

怖いと言えば、やはり後ろの方でたまに手帳を見ながら頭を抱える女や、本を読みながらにやっと笑う男や……そういえば、本を読んでいる人間が多いな。

後ろに座る高校生ぐらいの子や、後部座席に三人組からちよつと

空けて座っている男も本を読んでいる。

どちらも観光客だろう。

後は小学生の女の子。ひとり旅にしては幼いな。

ユリに似た花束を持つ男か女かよく解らない人は、見舞いかな。

途中に病院があるし。

それと、地元の間人にとけ込んでいる、作業服の男。たまに、ポケットから写真を取り出してじっと見つめている。何か理由ありなのだろう。

終点は、まだ遠い。

どこまでも続く田舎の光景を窓に映しながら、バスはゆっくりと走り続けた。

暖かな日差しの中。バスに揺られて、日野美智花はうつらうつらとしていた。

まだ、十歳の少女にとって初めてのひとり旅。

「苺が出来たから、摘みにおいで」

お祖父ちゃんから、真っ赤な苺と女の子の絵手紙が届いた。

だから美智花は約束どおり、お祖父ちゃんの家遊びに行く事にした。

しかも、ひとりでバスに乗って行くのだ。美智花にとっては大冒険だ。

昨日は興奮してなかなか寝付けなかった。そのせいで、ついっいうたた寝をしまっていた。

いけない。

寝過ごしたかも。

美智花が周りを見回すと、隣に腰をかけたお婆さんと目が合った。

「大丈夫。あんたが目をつむってから、まだ一度も止まってへんから」

口の端についたよだれを拭く美智花の手にキャンディを握らせながら、お婆さんが話しかけて来た。

「お嬢ちゃん、ひとり？ 何処に行くの？」

「あ、ありがとうございますいまひゅ」

慌てて、少し囁んだ。

お婆さんは、くすくすと笑う。

美智花は優しそうなそのお婆さんに、すこし安心してキャンディを口にほおりこんだ。

「これから、お祖父ちゃんのお家に行くところなんです」

「ほんまあ。お祖父ちゃんも楽しみにしてはるわ。きっと」
そうかな。

お祖父ちゃん、楽しみにしてくれているかな。

私も、楽しみにしているよ。お祖父ちゃんと、お祖父ちゃんが作った美味しい苺。

そんな事を考えながら、美智花もまた楽しげに笑う。

このバスに乗ることは電話で伝えておいたので、お祖父ちゃんがバス停まで迎えに来てくれる筈。あと、どれぐらいかかるのかな。

バスの中の時計を見ると、もうすぐお昼という時間。じゃあ、もうすぐだ。

お母さんが、お昼ちょっと過ぎには着くって言っていたもの。美智花の期待は、どんどんと膨らんでいった。

まだ、先は長いな。そろそろ昼食でも取ろうかな。

そんな事を考えながら、朝霞治は作業服のポケットから写真を取り出す。

作業服を着ているが、治は別にどこかの作業員ではない。お茶専門店「亜空館」のティーブレンダーだ。

契約農家の視察の為に、移動中。

作業服を着ているのは、農家で手伝う事もあるだろうと思つての事だった。

写真に写っているのは、別居中の妻。別居の理由は、仕事の都合だ。

カンナ、僕は元気にやっているよ。勿論あいいりも。

写真に向かつて、心の中で呟く。

一人娘のことを思い出すと、どうしても切なくなる。

連れて来れば良かったかな。でも、二歳のあいいりには、バスでの移動は無理だろう。母さんに預けて来たが、今頃さみしがっていないだろうか。

そんなことを考えている時に、斜め前の席に座る女の子とお婆さんの会話が耳に入った。

「これから、お祖父ちゃんのお家に行くところなんです」

あんなに小さいのに、ひとり旅。

あいりもいつかは……ああ、あいり！ お父さんはすぐにでもお前に会いに帰りたいよ。

そう思うと、あの女の子が他人のようにには思えない。お腹空いてないのかなとか、お昼の用意があるのかなとか、そんな事を心配してしまう。

「お嬢さん。そろそろお昼だけど、お腹はすいていないのかな。おじさん、おにぎり食べるんだけど。良かったら、半分こしないかい」
朝霞治は、座席をずらし斜め前の女の子に話しかけた。

母親の見舞いの為に厳選したネリネの花束を隣の座席に置き、陽水咲季は思案に暮れていた。

今日のおかずの事とか、誘われた合コンの事とか。

咲季は、花屋の店員。

生まれつきの女顔と華奢な体格の為に、二十歳を越えた今もたまたに女と間違われるが、元ヤンキーのれっきとした男だ。

窓の外に流れる風景を見ていたら、通路を挟んで隣の席に座る小学生ぐらいの女の子とお婆さんの会話が聞こえて来た。

小学生のひとり旅？

お節介かも知れないけれど、話し相手にでもなろうかな。

そんな事を考え、席を移動しようと腰を上げる。

「お嬢さん。そろそろお昼だけど、お腹はすいていないのかな」

そう言っつて、弁当箱を出したのは前に座る中年だった。

こいつ、危ないんじゃないか？

まさか、ロリコン？

咲季は慌てて二人の間に割り込んだ。女の子に向かって、とりあえず声をかける。

「やあ、こんにちは」

バスの中央座席でそんな会話が交わされていた頃。

後部座席の須藤隼人は、とりあえずシャットアウトを決め込んでいた。

周囲に、目には見えない壁を築き上げる。

理由は、ひとり分のスペースを空けて座っている三人組。

人形のように整った顔の男と、若い男、そして美女の三人連れだった。

真ん中の若い男の拳動がどうも不審。

運賃表をにらみつけたり、なんかぶつぶつと独り言を言っていたり。

無視だ。無視。

あと、数十分。

海外に留学中の隼人にとって、久し振りの自宅が待っている。

本に付箋を貼り付け、そっと追憶に沈む。

前列に座っていた高校生ぐらいの男の子と目が合うが、あえて無視。

久し振りの帰郷なのに、どうにもこのバスは居心地が悪い。早く着かないかな。

須藤隼人は深々とため息をついた。

友人と旅行の筈が、友人のドタキャン。

そんなわけでひとり旅中の高校生、谷川裕。

推理小説を読みながら目的地に向かう途中。ふと目を上げると、窓の外の木立の中にひとりの女が立っているのが見えた。

白い服を着た、若い女性。

少し離れているが、けっこう美人じゃないか？

あ、目が合った？

裕がそう思った時だった。

その姿が、まるで煙のようにふっと消えたのだ。

手に持っていた本を取り落としそうになりながら、裕は、大きく呼吸をする。

落ち着け。

世の中には、科学で証明されるものの方が多い筈。

そう、目の錯覚という事もある。

取りあえず、前の座席に座る人に声をかける。

「いま、あそこに誰かいませんか？」

同じ瞬間。

裕と同じシーンを目撃した人間がいた。

氷月沙弥。

自分探しの旅とか言いながら、実は現実に差し迫った就職活動から逃避中。

たまたま、窓の外を見ていた。

木立の中に、白っぽいワンピースを着た長い髪の女性が目に映り、「ああ、なんだか儂げな人だな」と何気なくその姿を目で追っていた。

その姿が、いきなり消えるまでは。

ゆ、幽霊？ まさか。私ったら、疲れているのね。きつとそうよ。手にした手帳を意味もなくいじくる。

その時だった。

「いま、あそこに誰かいませんか？」

後部座席に座っていた高校生ぐらいの子が、その場所を指さしながら尋ねたのは。

かんべんしてー！！

「な、何か言いました？」

答える声は完全に裏返っている。

少年は困ったように沙弥を見た。

「いや、やつぱりいいです……」

と、自分の席に戻る少年。

ええええええ？

そんな、自己完結しないでよ。

などと思いつながら、あらためて彼に話しかける気分にもなれず。

今夜は温泉にでもつかって、ゆっくりしようかと心に決める沙弥だった。

「なん力周りが不穏だネ」

人形がそつと囁いた。

そうかもなど、上谷秋紀が周りを見回した。

前の座席がやけに盛り上がっている。

「おいおい、前の方の奴ら立って話してるが危なくねえか？」

「別にそんなに揺れてるわけでもないから平気じゃん？ それよりあんなちっちゃな子ひとりで何してるのかな？」

答えるのは、秋紀になついている、死神。

もちろん、その姿は普通の人には見えない。

だから、それに返事をする秋紀の言葉ははたから見れば独り言にしか聞こえない筈だ。

「知らん。つかオレもあの年くらいの時はひとりでバスくらい乗ってたわ」

言ってから、さすがにまずいと思い、秋紀は沈黙する。

勿論、今更黙っても独り言を言う変な奴だと周りの人間に思われた事は、仕方ないだろう。

バスの中央部分では、最初こそ不穏な空気が流れたものの、気さくな美智花を中心に乗客たちの会話が續いていた。

美智花がお母さんが作ってくれたサンドイッチを取り出し、みんなで食べようと誘ったり。治が持ってきた紅茶を皆に勧めたり。

そうするうちに、最初は治を不審に思っていた咲季も誤解を解き、謝罪の意味もあって先ず自己紹介をした。

「陽水つていいいます。この先の病院に母が入院していて。その見舞いに行く途中なんですよ」

治の入れてくれた紅茶をひとくち口に含み、咲季はその仄かな香りを楽しむ。

「良い香りのするお茶ですね。ハーブか何かですか？」

「朝霞です。紅茶ですよ。何も香りについてはいません。それは、その葉そのものの香りです。甘味を感じませんか？ それも、その葉の持っている力……というか、味です。ウバという種類ですよ」

答える治は、さすが紅茶の専門家であり、そつがない。

しかも、接客のプロだ。

店を出しているクッキーを取り出し、咲季や美智花、お婆さんだけでなく後部座席に座る女性客たちにまで「試供品ですが」と、配っている。

クッキーを包むセロファンには、「紅茶専門店 亜空館」のロゴがひとつひとつ入っていた。

女性客が「どこのお店ですか？」と、尋ねる頃。

前方の座席では、ひよろりと背の高い男性が忍び笑いをもらし、前から二列目に座っていたブタのぬいぐるみを抱いた美少女が驚いて振り返り、その男性に冷たい一瞥を送ったりする一幕の後。

バスの速度が、落ち始めた。

エンジン音がおかしいと、気づいた者も居るかもしれないし、運転手の舌打ちを耳にした乗客も居るかもしれない。

道は急勾配にさしかかろうとしている。

その手前のバス停で、バスが停車する。

運転手は申し訳なさそうに振り返り、告げた。

「ご乗車の皆様、大変申し訳ありませんが、ここで下車をお願いします。このバスはエンジントラブルの為、車庫に引き返します。代替バスの手配は致しましたが、到着までに一時間ほどかかりそうです。次発のバスが約四十分後に到着しますので、恐れ入りますが、こちらでお待ち願います」

バス停の名前は「夜久峠」。

掲げられた案内板には、「夜久峠口」と書かれている。

神社の森にほど近い、昏間なのに何故かほの暗く感じられる場所だった。

t e r n 1 バスの中（後書き）

まだまだ、序です。

参加者の方、GMとしても物書きとしても未熟者ですが、これからも宜しく願います。

白雪さんと榎木さんがちゃんと入らなかった……ごめんなさい。

バスの乗客は、やれやれとため息をつく者ばかりだった。

「迎えを呼ぼうとおもったのに、圏外じゃないか」

携帯を手にしたサラリーマン風の男が、バスの運転手につっかかる。

「そう言われなくても……」と、尻込みをする運転手をフォローするように、ひとりの女性客がバスの後ろを指さす。

「ちよつと戻れば、繋がる所もありますよ」

地元の間人らしく軽装だ。連れの若い女性は旅行者に見えるので、遊びに来た友人を案内しているのだろう。

これ以上先に進むと、勾配がきつくなり道も細くなる。そこで立ち往生すればどうしようもないことを、運転手がもうもう一度、乗客に説明する。

事故を起こせば、元も子もない。

運転手に諭され、乗客達もしぶしぶ納得した。

十六人の乗客全員がバスを降ろされた場所は、「夜久峠」というバス停。

近くに神社があり、鎮守の森がうっそうと茂っている。

少し離れた場所に鳥居と階段があり、「御前神社参道」の道しるべが立てられていた。

乗客達は時間を確認し、とりあえず思い思いの場所に移動した。

「さつき窓からちらっと見えた学校のあたりなら、繋がる筈なんですよ。目印にもなりますし」

と、先刻の女性がサラリーマンの男性を案内する。

女性の連れだった観光客風の若い女も、仕方ないと首をすくめながらそれにつき合うことにしたようだ。

携帯がつかないことにショックを受けて座り込んでしまった少女がいた。

お爺ちゃんの家遊びに行く途中の、日野美智花だ。

バスの中で知り合った老婆が、「どこかに電話を借りに行こうか」と声をかけている。

隣の座席だった青年や作業服を着た男性も、幼い女の子が気になるらしく、フオーローしていた。

「あまり、動かない方がいいと思うけどな」

そう呟いたのは、前の方の座席に座っていたカップルの男だった。

「このあたりって、昔から……」

「ちょっと、変なこと言い出さないですよ。つまらない昔話なんだから」

彼女にたしなめられ、男は「ま、そうだよな」と言葉を濁す。

空は相変わらぬ快晴。だが、森が近いせいだろうか、何故か気温が冷たく感じられる昼下がりだった。

留学先のアメリカから帰省中の須藤隼人は、神社の階段あたりで煙草に火をつけた。

携帯は、やはり圏外。ここで待つしかない。

バスに乗車してからずっと禁煙状態だったので、やっと人心地がつく。

紫煙を吸い込むと、軽い目眩を覚えた。喫煙により、一時的に血圧が下がったのだろう。

おいおい、そんなにやわだったか？ と、自分に苦笑する。

周りが、やけに静かな事に気づいたのは、その時だ。

氷月沙弥は、先刻バスの窓から見えた光景から、まだ立ち直っていなかった。

こんなところで、バスを降りるの嫌だな。

そう思いながらバスを降り、手持ち無沙汰に鞆を抱きしめる。

電話をかけに行くという話をしていた人がいたので、自分はどうしようかなと少し考える。

あまり、動きたくないな。なんだか不安だし。

みんなが動かないのなら、自分も動かないでおこう。

そんなことを考えていると、誰かに声をかけられたような気がした。

振り返ろうとした瞬間、立ちくらみを起こして、たたらを踏む。

やっぱり疲れているのかなあ、などと考えて改めて振り返る。だが、そこには誰も居なかった。

一番最後にバスを降りた白雪ミコトは、ただ、会いに行く相手のことだけを考えていた。

ミコトは、社長令嬢。オリエンタルな美人で、癖ひとつないつややかな黒髪を背中まで伸ばしている。レースをふんだんにつかったゴスロリ風のワンピースは着る人を選ぶだろうが、それを見事に着こなしている、どこか無表情な少女だ。

軽装で、持ち物は小さなバッグと胸に抱いたぶたのぬいぐるみのみ。

実は婚約者が居り、ミコトは彼に会う為に家出をして、普段は乗らない乗り合いバスに乗った。

こうでもしなければ、婚約者と二人きりで会うことすら、ままならない。監視付きのデートには、うんざりだ。

バスを降りて、ミコトは逸る気持ちを必死に押さえていた。

歩いた方が早いかもしれませぬ。でも、ちゃんと道を知りませんし。

そんな事を考えていると一瞬、視界が揺らいだように思えた。

ミコトは、さっきまでとおなじ状態でその場所に立っていた。いつの間にか、バスは去っている。

それは、解る。

だが、十人以上居た筈の乗客はどこに消えたのか。

ミコトが見える範囲には、二人の人間しかいない。
おぶたさま。何が起こったのでございましょう？

胸に抱いたぶたのぬいぐるみに、心の中で問いかける。

『遭難』

ぶたのぬいぐるみことおぶたさまが、ミコトにだけ聞こえる声で
そう答えた。

バスから下ろされた美智花の目には、涙がたまっていた。

こんな所に置き去りにされるんだ。そう思うと、心細くてたまら
ない。

バスの中で知り合ったおばあさんやおじさん、お兄さんたちに慰
められ、ようやくと「お母さんやお祖父ちゃんに電話しなきゃ」と、
思い出す。

携帯を取り出すが、いつまでたっても呼び出し音が鳴らない。

「携帯、繋がらない……」

美智花が呆然と立ちつくし、その膝ががくんと崩れた。

どうしよう、携帯がつかない。

お祖父ちゃんに連絡しなくちゃいけないのに。

「どうしたん？ 電話？ このへんは、繋がらへんのよ。他のお家
に借りに行こうか？ おばあちゃんも連絡したいし。一緒に行こう」

おばあさんがそう言えば、

「大丈夫だよ。そんなに泣かないで」

花束を持ったお兄さん、陽水咲季もまた慰める。

「美智花さん、君はいくつだったかな？ 十歳だよ。自分の考え
もすっかり持てる、一人前のレディーだよ。一人でここまで来れた
んだもの」

ここは言葉の通じない外国じゃないし、ジャングルでもない。落
ち着いて、周りをよく見なさい。それから、自分の一番しなければ

ならない事は何なのか、考えてみよう。

そう言っただけ論じたのは作業服を着た、朝霞治。

美智花にはちよつと難しい言葉だったが、何となく言われている事は解った。

黙って泣いていたり、携帯がつかないとかだだをこねたりしているのは、恥ずかしい事だ。せつかくちよつと大人になった姿をお爺ちゃんに見て貰おうと思ったのに、こんな事じゃ全然駄目。

「嬢ちゃん、どうした？」

駆け寄って来たのも、美智花は覚えていないが、一緒のバスに乗っていた人だろう。

ようやつと落ち着いた美智花が、みんなにびよこんと頭を下げる。これ以上、いろんな人を困らせちゃいけない。

「電話、借りに行きたい。連れていってくれますか？」

おばあさん、陽水さん、朝霞さんの顔を見ながら美智花が告げる。みんな、笑ってうなずいてくれた。

「なんだ、平気だったじゃねえか」

と、上谷秋紀が小さくぼやいた。

だが、その視線の先には誰もいない。普通の人間にはそう見えるだろう。

秋紀の目には、確かにそこにあるモノが映っているのだが。

そう。そこに居るもの 『死神』に「あの子大丈夫？」言われて、秋紀は女の子 美智花に駆け寄ったのだ。言われなくとも、幼い子供がいきなりへたり込んだのを目の当たりにしたら、ほっとけないのが上谷秋紀という青年なのだが。

結果、出遅れただけ。しかも、『死神』に話しかけるのを見て、その場に居合わせた人たちは一様に首を傾げている。

「しーらない。てか他にも困ってそうな子いるよ、ほらあのブタちゃん人形持ってることか」

「ざけんな、オレはお助けマンじゃねーんだよ」

眩きながら、秋紀はそちらを振り返る。

今、美智花たちにとって自分が明らかに不審者であること、そして心からの心配性でお節介な性格を『死神』に見抜かれたこと、それ以上の胸騒ぎ。

そんなものから逃れるように、『死神』が指さす方向を見る。

確かに、そこにはひらひらの服を着た少女が立っていた。

「いつてらっしやーい」

声を揃えてそう言ったのは、秋紀に憑いている『悪霊』二人組。

「うっせえ」

それに短く一喝して、秋紀は改めて少女を見た。

筈だった。

目を離れたのは、ほんの一瞬。だが、そこには誰も立っていないかった。

人が、消えた？

まっさきに、そう思う。

人がいきなり現れたり消えたりって、うちではよくあることだが、普通はあまりない事だよな？

秋紀がそんなことを考えていると、連れのヨーコ　美女の姿をしている狐の大妖、『妖狐』　が小さな声で「ふうん」と呟いた。

「なんだよ？」

秋紀の言葉に、ヨーコはしばらく鼻をひくひくとさせていたがやがて、「うーん、どうしようっかな」と小首をかしげる。

「だから、なんだよ？」

詰め寄るが、さすがは狐と言うべきか。くすくすと笑っただけで、決して本心は示さない。

「アキちゃんガンバ。　ま、別に頑張らなくてもいいけど」

「はあ？」

「なるようには、なるんじゃない？」

これは、絶対に何かある。だが、ヨーコは話す気はないらしい。　　だったらこれ以上の追求は時間の無駄だ。

すぐに悟った秋紀は、他の情報源を探すことにした。探すまでもなく、それはすぐ側にあった。さっきのバスで、前の座席に座っていた高校生ぐらいの男の子が、呆然と立ちつくしている。

何か、見たな。

直感的に悟って、秋紀はそちらに足を踏み出した。

谷川裕は、立ちつくしていた。

立った今、目撃した場面をもう一度反芻する。

バスを降りて、手持ち無沙汰だった。持ってきた小説もほとんど読んでしまっている。この待ち時間をどうしようか。

そう思っていると、側に立つ女性の姿が目に入った。さっきのバスの中で、「窓の外に、人がいましたよね？」と、裕自身が声をかけた女性だ。返事は、確か「何か言いましたか？」だったかな。

見ていなかったのだと納得してそれ以上は聞かなかった。今、彼女は不安そうに、鞆を抱きしめている。

バスの窓から、裕は見た。

木立の中で、不意にかき消えた白い服の女。

気のせいだって。気のせいじゃなければ、散歩中の女性が途中で何かに足を取られて転んだ、に一票。視界から消えたから、姿が消えたように見えただけ。ただの目の錯覚だ。

苦笑しながら、鞆を抱えた女の人に近づく。さっきはさっさと会話を切り上げてしまったが、もしかしたら失礼だったかも知れない。「こんにちは」

裕が、話しかけた時だった。

不思議そうに周りを見回した女性が、まるで霧にかかったかのようにかき消えたのは。

気のせい、じゃないよね？

足下を見ても、誰も転んでいない。

人が、消えた？

落ち着け。こういう時は、とりあえず情報収集だ。

そう思っていると、前から誰かが近づいて来るのが見えた。確か、後ろの座席に座っていた人たち。妖艶っぽい美女と、男性二人という異色の取り合わせだった。

「あ、こんにちは」

できるだけ、平静を装って裕が声をかける。

「ん？ お前どうした？」

先に立つ青年が、怪訝な視線を裕に向けた。

裕としては、いきなり質問の形で返されたので、「何が？」としか答えられない。

「オレはアキ、上谷秋紀。こっちは人形とヨーコ。お前、なんか呆けてたみてえだったから。なんかあったのか？」

「谷川裕です。そんなに呆けてたかな」

苦笑する裕に、

「ヒロね、OK。単刀直入に聞くけど、ひとが消えたよな？」

上谷秋紀と名乗った青年が、真相をいきなり告げる。

なんなんだ？ この人は！

いや、確かに消えたんだけど。しかも、目の前で。

裕は、深く息を吸った。

変に場慣れしているというか、異常現象に慣れているというか。

しかし、人が消えるなんて事をまるで普通の出来事のように語る人って、一体？

でも、これはある意味、貴重な情報源かも知れない。

それにしても、いきなり「ヒロ」とは馴れ馴れしい。

そんなことを思いながら、裕は頷いた。

榎木浩介は、バスを降りた時に何か光るものを目にとめた。

拾ってみると、真珠色の小さな玉。

なんだろうなと思って手を伸ばした時、何となく、周囲の景色がぼやけたような気がした。

慌てて辺りを見回す。

あら？ みんな何処に行ったのかしら？

周りに人影は、ない。

拾った玉を無意識にポケットに入れ、もう一度周囲を見回すと、少し離れた場所に三人。バス停近くに五人ほど、そして自分に一番近い場所に四人。

びっくりした。みんな、居るじゃない。

そう思って、浩介はそちらに歩を進める。

そんな時だ。二人の会話が耳に入ったのは。

「人が消えたよな？」

人が消えた？

慌てて周りを見回す。

あつちに、カップル。あつちには可愛い女の子とバスの中で友達になつていたおばあさんや青年達ね。

さつき見た三人は、後ろの方に座っていた地元の女性と遊びに来た友達みたいな女の子。もうひとりはやっぱり乗客だったサラリーマンよね。

確かに足りないわ。

前の方に座っていた、周りに鉄の城壁を作っていた女の子。後ろに座っていた、ちょっと好きな男の子とか……ううん。好みと言われれば、誰も好みなんだけど。

そう。ショートカットの可愛い女の子もいないわね。

それにしても、私としたことが。

こんな大事件が起こっているのに、何をばおっとしていたのかしら？

そんな事を考えながら、幸助は近くにいた四人 話をしているのはそのうち二人だけだったが 呼びかける。

「ねえ、何のお話かしら？」

最初に振り返ったのは、高校生ぐらいの男の子だった。

「あ、今人が消えたって話をしてたんですけど……」

訝しげな視線は良くあることなので、気にはしない。だが、返答の内容はとんでもないものだった。

人が消えた？ そんなバカな……もし本当ならなにか事件に巻き込まれているってことかしら？ いや、ちよつと違うかもね。

「あの？」

考え込む幸助に、その高校生が少し心配そうに声をかけて来る。

「あら、ごめんなさい。考え事をしていただけだから……ところで、自己紹介がまだだったわよね。私は榎木幸助、貴方達は？」

「谷川裕」「上谷秋紀」と二人がそれぞれの名前を名乗る。残り二人は幸助の事はアウトオブ眼中。幸助は頷き、にこりと微笑んだ。「ありがとう。で、さっきの話。詳しく聞かせていただけるかしら？」

ここで、決めのウイנק。

ヒロとアキの二人が固まる事には、気にしない。

榎木幸助。

最強のオ マと呼ぶ者もいる。

もちろん、そんな二つ名で呼んだ奴は、ただでは済ませないが。

「バスが行ってから僕、暇だったんで誰かに話しかけようと思ったんです」

と、ヒロこと谷川裕が、事情を話し始めた。

その人が、いきなり目の前で消えた。

「まさかと思っていたら、アキさんがやってきて同じことを言ったので……。そういうこともあるのかと」

少年は、明らかに半信半疑。

うんうん。そうよねえと、幸助は思う。

悩め、少年。少年は悩んでいるのが素敵よね。

「アキさんほかに何かありますか？」

幸助の思惑を余所に、裕は意見を秋紀に求める。

「ん、まあそうだな。大体オレもそんなもんだ。簡単に言や、神隠しってヤツだろ」

神隠し、ねえ。

幸助はすこし首を傾げる。

だったら、ある意味、問題ないじゃない。

「巻き込まれた現場に、偶然居合わせちゃっただけかもね」

人が消えた。

それが本当なら、おおごとだ。

だが、幸助がそれを見たわけではない。

消えたんじゃないくて、誘拐とか？ だったら、事件に巻き込まれたと考える方が正しいと、幸助は思う。

それよりも、気になる事。

（アキちゃんは可愛いけれど、お連れは問題よね。すごく綺麗な女の子は、なんだか空気が違う。多分、触れると火傷するタイプよね。もうひとりはおこちもものすごく綺麗なんだけど、私の食指は動かないわね）

幸助は、そんなことを、考えていた。

表情に乏しくて、まるで人形みたい。

バスに乗っていた人たちの中で、幸助の一番の「おきに」は、あつちの小さい女の子。やっぱり可愛いわあ。

うふふつと、小さく笑う、幸助。

秋季も裕も、完全に引いているが幸助は全く気にしない。

危ない？

失礼ね。別に何もしないわよ。アナタ、子供を可愛いと思わない？

可愛いでしょ？

気になるでしょ？ だから、つつい話しかけたくなるでしょ？

私は、それをしないだけ。

多分、あの花束を抱えたおにいさんとか作業服のおじさまと、同じよ。

と、幸助は自分の思いの中にひとりこんでいた。

勿論、彼は気づいていなかった。

いな、きつと誰も気がついていなかったのだろう。

バスが去った後、彼が突然何もなかった場所から現れ出てきた事には。

t e r n 2 神隠し峠(前編)(後書き)

今回の(秘密の)テーマ。

榎木さんと上谷さんを書く！

書けたかな。

書けているといいな……

t e r n 2 神隠し峠（後編）

その青年は、山田という名だった。ひと目でコンビニのアルバイト店員だと解る。

何故解るのかというと、その大手フランチヤイズコンビニの制服（名札付き）姿だからだ。その格好で通勤するのは立派な社則違反なのだが、彼の勤めるコンビニ店長はかなり大雑把で、そういう細かい事は特に咎める事もない。

それを幸いとバイトの日は制服を着て通勤、帰宅をしている山田青年。そんな青年が、気になる美少女と出会った。

雛には稀な……ごく稀。ごくごく稀ぐらいの美少女で、しかも格好がまたすごい。ゴスロリというのだろうか、このあたりでそんな格好をする人間が居るとすれば、小学生のピアノの発表会ぐらいのものだと思う。

まるで、ネタが服を着て歩いているようだと、山田青年は思った。いや、服からしてネタなのか。

バスを降りてからは、これ幸いと彼女がよく見える位置につけ、携帯で隠し撮りを試みたり。

そんな時だ。その少女の姿がいきなり、見えなくなったのは。えっと。

山田青年は、考える。

バス停の「夜久峠」の文字に思い出される追憶が、彼にはあった。そう。峠道でかくれんぼをしていて、ばあさんにこっぴどく怒られた記憶。

ばあさんは、何て言った？

確か……。

ひとりの男性が、山田青年に近づいて何かを話しかけた。

だが、山田青年は聞いちゃいないし見ちゃいない。

そういえば、さっきあっちのカップルが何か言っていたな。女の

方は知っているぞ、観光協会の鈴木さんだ。

山田青年は、二人に声をかける。

「ちよっと確認したいんだけど」

二人が、振り返る。

「そっちの人が言っていたのって、アレのこと？ ほら、昔この先の峠が『神隠し峠』って呼ばれてたっていう、アレ」

二人は、即座に固まった。

鈴木さんが、ことさら大きな声で「ああ、迷信ね」と答える。

「うんうん。昔、このへんで肝試ししたら叱られたよ」

鈴木さんの彼は、はははとわざとらしく笑っていた。

空気の読めない山田青年に、出世の道は険しい。

人が消えただけの、「神隠し峠」だの。

そんな無責任な話が、バス乗客たちの間で行われている事など知るよしもない三人は、実は同じ場所に居た。

そう。

居る場所はバスを降りた直後と、全く変わらない。

須藤隼人は神社の階段近く。

氷月沙弥は、バス停がよく見えるあたり。

白雪ミコトは、すこし人を避けた場所。

違つとすれば、人が居ない。まずは、その一言に尽きる。だから須藤隼人も、最初は他の他の乗客が自分達を置いてどこかに移動したと思つた。

残っているのは、二人。ブタだかタヌキだかのぬいぐるみを抱いた少女には、見覚えがある。同じバスに乗っていた乗客に間違いない。もうひとりのショートカットの女性は覚えていないが、明らかに旅行者風。やはり同じバスに乗っていたのだろう。

隼人がそんな事を考えていると、ショートカットの方がぬいぐる

みの女に近づいて行くのが見えた。

「ちよつといいかな？ 他の人達、どっちに行つたか知りませんか？」

「わたくしは、気付いたらここに居たのでございます。ゆえに他の方のことは存じません。ですがもしあなたも遭難していらっしやるのであれば、一緒に元の道を探しませんか？」

えらくまた、まどろっこしい話し方をする女性だなど、隼人は小さく肩をすくめた。

しかも、遭難？

俺たちは、一步も動いていないのに、どうやって遭難するつていうんだ？

だが、少女の言葉が正しい事を、隼人はすぐに認める事になった。一步も動いていないのに、明らかにさっきまでと違う点が見つかったからだ。

隼人が足早に歩み寄つたのは、峠へと続く道だった。アスファルトだった筈の道路は、砂利道になっている。

それとも、最初から砂利だったのか？ 砂利に残る跡を見ると、そこにはタイヤの跡はなかった。

代わりに、何かの車輪の轍と足跡がかなり残されている。

バスのタイヤのように大きなものではないし、その傍らについている足跡、真ん中についている獣の足跡から察するに、荷車とそれを引く獣、そして荷車を押す人間の足跡のようだ。しかもその足跡は、どうやら靴ではない。いびつな楕円形の足跡。隼人もあまり詳しくはないが、草履で歩くとこんな足跡がつくかも知れない。

荷車に、草履履き。俺たちは江戸時代にでも迷い込んだのか？

首を振り、もう一度バス停の様子を確認する。

隼人は思わず笑ってしまった。

笑うしかなかった。

バス停を意味する標識も、その横に置いてあつたベンチもない。

「あの？」

その頃になつて、後ろの方でもうひとりと話していた女性が隼人に声をかけてきた。

「ちよつとお伺いしたいんですが」

振り返つた隼人に、不安そうだった女は少しほつとしたようだ。

「さっきのバスに乗っていた方ですよ？ 他の方がどこに行ったかご存知ですか？」

「他の乗客が何処に行ったのかは解らないが、どうやら俺たちが別の場所に移動したらしいな」

自分で言つておきながら、あまりに信じがたい出来事に隼人は心の中では動揺していた。

本当はバスの中で眠っていて、これは夢なのだと言われた方が、よほど信じられる。

「別の場所？」

案の定、女は訝しげな様子になり、周りを見回した。

「俺たちは、バス停で降りた筈だろう？」

隼人の言葉に、女はバス停の標識がなくなっている事に初めて気がついたようだ。固まった後に、小さく身を震わせる。

不安そうな女の表情に、ぶっきらぼうな態度を取りすぎただろうかと、隼人は少し後悔した。

「さっき、白雪さんも遭難だつて言つてました」

女はそう言つて、背後に広がる鎮守の森と、その脇の鳥居、階段とその上に見える神社の屋根へと視線を移動させる。

まるでそこに、彼女の不安の権化がいるかのよう。

解りやすい女の行動に、隼人も神社を見た。

そして今度は、側に建つ民家を伺う。

これからどうするかを決める為には、調べられる事を調べておかなければならない。

ここは、そんな場所であるような気がする。

「私は、氷月沙弥つて言います。あちらに居るのは、白雪ミコトさん」

隼人が彼女から視線を逸らすと、女は慌ててそう告げる。

「もしも、もしもですよ。何ていうのか、超常現象？ みたいなものが働いて、私たちが遭難したのなら。やっぱりひとりで行動するのは危ないと思いませんか？ だから、その……」

「そうだな」

と、隼人は小さく苦笑した。

氷月沙弥という女性。本当に、解りやすい。だから、ある意味安心できる。

「確かに一緒に行動した方がいいだろう。だから、ちょっと待ってくれないか？」

荷車と足跡は、この峠を昇って行ったようだ。

足跡の数は、かなり多い。ならば、かなりの人間が峠に向かって移動したという事になる。そして、民家は静まりかえっている。

それらからはじき出される結論は、この辺りの人間は今、集団でどこかに行ったという事になる。ならば、民家を尋ねるのは時間の無駄か？

待ってくれと言われた氷月沙弥は、やはり落ち着かなげにしていた。と、何かを拾い上げる。

光にそれを透かすようにしてから、沙弥はそれを隼人に差し出した。

「これ、何なのでしょう……？」

沙弥は、階段から転がってきたと言う。

隼人はそれを借り、手に取った。

一センチぐらいの大きさの、琥珀色の玉。本物かどうかは解らないが、中には木の葉のようなものが入っているので、本物かも知れない。糸を通す穴が空いている所を見ると、アクセサリーの一部だろう。

階段から転がってきたというのなら、上に誰か居るのか？

隼人がもう一度、神社を仰ぎ見る。

その時だ。

ずっと二人と　いや、その視線で解った。隼人と距離を取っていた白雪ミコトが、二人に向かって歩み寄って来たのは。

すうっと、優雅とも思える仕草で彼女の右腕が上がり、その白魚のような人差し指が階段の上に見える神社の屋根を指さす。

「神社に秘密があります。行きましょう」

「白雪さん？」

氷月沙弥が、驚いたように彼女を見る。

「その、根拠は？」

と隼人が言うと、白雪ミコトは少し嫌な顔をした。

「じつとしていても、事態が好転するようには思えません」

ミコトの答えは、正確には隼人の問いに応えたものではない。だが、彼女が言う事は正しいと、隼人は納得した。

「須藤隼人だ。動くにしても、氷月さんが言うように三人で行動した方がいいと思う」

ここが何処だか解らないが、ここにいるのは、三人だけ。協力は確かに必要だと思う。

隼人が名乗ると、ミコトもまた自己紹介をした。

「白雪と申します」

そう言って、ミコトはじつと隼人を見つめる。

美少女だが、表情をあまり感じさせないそのおもてに、隼人がやや居心地の悪さを感じた頃。

「須藤さん。貴方を信用することにいたします」

そう言って、ミコトは小さく笑った。

なんなんだ、この女は。

そうは思ったものの、別に何か反論する程でもない。

そんな隼人と、ふたりの言葉のやりとりの間、忙しく交互に見ていた沙弥に、ミコトはくるりと背を向ける。長いさらさらの黒髪が、ふわりと輪を描いた。

呆然と立ちつくすふたりを後目に、ミコトは先頭に立って階段を上り始めていた。慌ててふたりが後を追う。

「ミコトさん、行動がいきなりすぎ」

沙弥がたしなめると、

「そうでしょうか？」

ミコトが小首をかしげる。

三十段ほどの階段を上ると、二つ目の鳥居がある。

それを越えると、少し開いた場所に出た。

神社らしく手水鉢があり、そしてその先に本殿が堂々と建っている。

その本殿の前に。

多分、神社らしいのだろう。だが、隼人にはあまり馴染みのないものがあつた。

多分、茅の輪というものだろう。

茅の輪くぐりという儀式があることは、隼人も知っている。でも、今の時期に行われるものだったかどうかまでは、覚えていなかった。

三人が何気なく茅の輪に近づいた時。

いきなり湧いて出たように、小さな人影が現れた。

無意識に、隼人はふたりを庇う位置に立つ。

「ぼ、ぼく美味しくないよ！」

その小さな人影は、三人に向かってそう叫んだ。

バスを降りてからというもの、陽水咲季はなんだか落ち着かずになっていた。

何と言えばいいのか　そう、血が騒ぐ。

まるで、この暗い森の精に酔ったかのような。

優しい顔立ちをしている咲季だが、かなりやんちゃをしていた頃もあつた。危ない橋も渡って来た。そんな彼のとぎすまされた第六感が告げていた。

普通ではない。そんな事が起こり始めている。そんな気がする。

バスの中で知り合いになった朝霞が、小声で「人が減ったような気がしないか？」と尋ねてきたのは、そんな折りだった。

「人が、ですか？」

陽水咲季は、周囲を見回し、確かに人が少ない事に気がついた。特に、異彩を放っていたゴスロリな女の子や煙草を吸っていた男の子。そんな人たちの姿が見えない。

僕らが、美智花ちゃんに注意を向けてる間にどこか行ってしまったのかな？ でも、そんなに長い時間じゃなかったよね。人が居た痕跡も残ってないって、そんなことあるのかな。

まさか、突然消えた？

ありえない。そんな、神隠しでもあるまいし。

咲季が、思った時だった。

『神隠し峠』。

その単語が耳に入ったのは。

まさにそんな事を考えていた咲季は、驚いて声のした方向を伺う。コンビニの、アルバイト店員の格好をした青年が、カップル風の男女と話をしているのが見えた。

カップル男女は、焦ったように「迷信」とか「昔話」を強調している。それが咲季には気になった。

それより、「神隠し」。

自分の第六感と、フリーター男性が発した言葉の関連性に、驚愕する。

なんだろう、この符合は。

「朝霞さん。ここは、バラバラに動くのは避けた方がいいと思います。何が起こったのかは解りませんが、多分、一緒に行動した方がいい。そんな気がするんです」

咲季は、他の人には聞こえないように朝霞に耳打ちをした。

今、この場に居る人間は他人ばかりだ。だけど一緒に居た方が良く、咲季は思った。

朝霞は「僕もそう思うよ」と頷いた。

そして、バスを降りてから、ずっと一緒にいたお婆さんに話しかける。

「お婆さん、この神社にはどういいうわれがあるんですか？」
神社？

朝霞の言葉に、咲季は初めてそこにある鳥居に気がつく。

こんな所に神社があることに、咲季は全く気づいていなかった。というか、普通は神社の前なんだからバス停も「神社前」とかにしないのかな。その方がよっぽど解りやすいのに。
そんなことを考える。

そして、尋ねられたお婆さんは、「神社のゆらい」と言われてとっさに言葉が出なかつたようだ。

「えっと。何て言われてたかなあ。確か氏神さまが……」

最初から咲季は気になっていたのだが、このお婆さんの言葉は関西弁に近い。

生粋の地元の人ではなく、大阪のあたりから来た人なのかなと思う。

そのことを、朝霞に伝えようとした時だ。

「御前神社は、かつてこの土地の人々を苦しめた荒ぶる神を討伐した英雄を祀っております。他には失せ物探しや、つきもの落としのご祈祷に來られる方も多いですよ」

背後から、そんな声かけられる。

朝霞と咲季は、ほぼ同時に振り返った。

二十歳前後の女が、立っている。

白いワンピースと、背中の中程まで伸ばした漆黒の髪が印象的だが、なにより目に力がある。

振り返った瞬間から、いきなり引きつけられた。今まで、何の気配もなかつた筈なのに。

「あ、驚かせてしまいましたか？ 私はその神社の者で、尾咲と申します。さっきのバスに乗られていた方ですよ？ あちらで同じバスに乗られていた方から事情を伺いました。宜しければ、休憩し

て行かれませんか？ 電話もありますよ」

多分、この女性が言うのは、さつき携帯の電波を探しに行った二人の女性とサラリーマンの事だろう。

女性の言う事に、別におかしな点はない。

だが、どうにも釈然としないものを、咲季は感じていた。

気配を感じさせなかったことといい、この胸騒ぎといい。どうにも、しっくりとしない。

カップルの男性の方が、女性に何かを囁く。

「トイレ？ 勿論あるんじゃない？」

女がちよつと呆れたように、連れを見る。こういう時、女の方がデリカシーに欠けると思う。

逆の立場だったら、絶対に怒っているくせに。

「ええ、お手洗いもお使い下さい。みなさんも如何ですか？」

尾咲が声をかけると、離れた場所に居た人たちも頷いた。

あれ？ と、陽水が不審に思う。

三人組のひとり、表情に乏しい青年が具合が悪いらしく、お連れの青年に寄りかかっている。

熱中症かな？ けっこう涼しくなってきたけれど。

すぐにでも電話をかけたい美智花や、具合がわるい男性を連れた青年とのお連れの意見も聞き、全員が神社で休む事に決まった。

だが、病院に行く筈だったお婆さんは足が悪いらしく、階段が苦手のようだ。

「陽水さん、一緒にゆっくりと登ってあげてくれるかな。美智花さん、おばあさんの荷物もってあげてくれないかな？ 重い？」

朝霞さんに言われて、咲季は頷く。

膝の悪いおばあさんには、この階段は辛いだろう。

十歳の少女、日野美智花もお婆さんの荷物を手に取る。

朝霞はそれを見て、「僕は先に行って彼女を手伝って来ますね」と、さつきの女性について階段を軽やかに駆け上がって行く。

朝霞が去った後、おばあさんに手を貸しながら、咲季はなんと

なしにさつき変な事を言っていたカップルたちの行動に気をつけていた。

「人が、消えたと思う」

咲季が何とか聞き取れるぐらいの小声でそう告げたのは、「神隠し峠」とかいう重大発言をした、フリーター。

「まさか。神社のそばなのに？」

応えたのは、カップルの女の方。その後、更に声が小さくなった。よく聞こえない。

目立つ人が居たはずとか、本物の事件はやめてよとか。

そんな会話が断片的に聞こえて来る。

どうやら、観光協会か何かが自作自演で観光客を呼ぼうとしたことがあったみたいだ。

はた迷惑な話だなと、咲季は苦笑する。

もしかしたら、今回の件もそうなのかな？ 観光客を巻き込んだ

びっくり企画みたいな。

そう考えた方が、明らかに解りやすい。

だけど、この胸騒ぎは何なんだろう。咲季が、そんな事を考えていた時だ。

「『旅人』だから心配ないと思うけれど。古式にのっとって、氏神様にお願いしに行く？」

カップルの女性。話の流れから察するに観光協会の関係者の女性だ、そう言っただけの二人を見る。二人は神妙に、頷いた。

何だ？

この地域は、未だにそんなに信仰が深いのか？

咲季は自分が手を引く老婆をちらつと見る。

「大丈夫ですか？ 辛いんだったら、僕が背負ってもいいですよ。

こう見えても、体力には少し自信がありますから」

咲季は、先刻の三人の会話から、この地域に根付く氏神への信仰を大きさを感じていた。

「神隠し」という事が、実際にあるらしい。そして、この地域の

住民は「氏神様」とやらへ縋っていたのかと。

自分で、何をするでもなく。

そういう、土地柄なのだろう。

咲季にとつてもものすごくもどかしいのは、ここの土地柄とは別の問題だ。

咲季は、思い出していた。

かつて、彼が居た不良グループの内起こった闇討ち騒ぎ。犯人は判らない、でも何人も仲間がやられた。そこで皆が頼ったのは、何時も仲間内の色んな問題を解決してくれた人物。

結局、犯人はその人物という、実にお粗末な結末だった。

咲季は神社を仰ぎ見る。

考えすぎだよな。

「あの、お婆さん」

と、咲季は手を引くお婆さんを振り返った。

「この辺りの事、ここの神様の事も含めて、良かったら少し教えてくださいませんか？ 知ってる事だけでいいですから」

そうやなあと、お婆さんは答えた。

「うちが嫁に来た頃に聞いたんやけど、この先の峠は神隠し峠って呼ばれていて、不思議な場所やったんよ。一本道やねんけど迷いやすいというか……一時間ほどで峠を越える筈なのに、半日ぐらい歩かされたり、元の場所に戻ったり。だから、峠を越える時は必ず、氏神さんにお参りしなあかんって言われてたなあ」

もう、何十年前も前の事やけどと、お婆さんは語る。

アスファルトが引かれ、観光バスが往来するようになってからはそんな話ほとんど聞かなくなったと。

そうですね、と咲季が視線をバス停に向ける。アスファルトの道が、延々と伸びていた。

「一人では大変でしょう。手伝いますよ」

お茶と茶菓子の用意をしていた女性に、朝霞治がごく自然に語りかける。

尾咲と名乗った女性は、少し驚いたように振り返った。

「あ、これ。うちの店で出しているものですが、よろしければ」

朝霞が差し出したクッキーを、女性は嬉しそうに受け取る。

「では、お言葉に甘えて。じゃあ、水を汲んできて頂けますか？」

そう言って、尾咲は薬缶を差し出した。

「この湧き水は、日本の名水百選に入っているんですよ。あちらの階段を上った所に亀の置物を置いた井戸がありますので、そちらで」

渡された薬缶を手にしたまま、朝霞はじつと女を見る。

商売柄、人を見る目は肥えていると思っている。

「あ、電話を先に使われますか？」

訝しげに尋ねる、女。朝霞は率直に告げた。

「電話は、後で借りますね。……それで。人が消えるようですが、

この辺り。消えた人はどうなるんです？」

「人が消える？」

その言葉を、何度か反芻した後で、尾咲はくすつと笑った。

「まさか。この先は迷いやすいので、『神隠し峠』って言われている

ますけど……人が消えたりしたらおおごとですよね」

教科書に書いたような、答えだった。

「そうだね。確か頂き物の果物があつた筈」

尾咲は、着々と準備を進める。なかなか、手際が良いと朝霞は思った。

「僕は、朝霞治といいます。あなたは？ この神社の方ですか？」

朝霞の言葉に、尾咲は「どうしてそんな事を聞くのか」と言いたげな、不思議そうな視線を向ける。

「尾咲かえで、です。この神社で生活を営んでいます」

確かに、彼女はどこに何があるかちゃんと解っている。

だが、何か引つかかる。

そんな事を考えている時だ。

遅れてたどり着いた人々が、社務所に入って来た。

その中にいたひとりの美女が、つかつかと尾咲に歩み寄る。

「ちよつと聞きたいんだけど、又シはお出かけ中かな？」

「ああ、神主ですか？ 所用で出かけていますけど、御用ですか？」

尾咲の言葉に、美女は小さく肩をすくめた。

「ああ、別に良いんだけどねー。うちの連れが具合を悪くしちゃつて。ちよつと休ませてやってくれない？」

二人のやりとりの間に、不意に薄暗くなつたような気がした。

朝霞が窓を見ると、空には重い雲が立ちこめつつあった。

ゲームマスターの独り言

このターンは、けっこう難産でした。（苦笑）

登場人物が多い場合、自動的に「サブシナリオ」が稼働することは、最初から決めていました。

参加者を十人以下に限定したのも、十人を越えるとサブシナリオをもうひとつ考えないといけなくなるかと思ったからです。

シナリオを分けることで、ひとりひとりがよりクローズアップされる利点と、疎外感があるかもしれないという不安がありました。

クローズアップの利点は、小説には生かされたかなと思っていました。

物語は、まだ続きます。

参加者の皆様。お時間を頂き、申し訳ありません。これからも宜しくお願い致します。

tern3 荒ぶる神の社（前編）

「ぼく、美味しくないよ」

とつさにそう叫んだ少年を、氷月沙弥は不思議に思った。

まるで、突然そこに湧いたかのように現れた、少年。その第一声が「ぼく、美味しくないよ」なのだ。沙弥は、完全に呆気にとられていた。

ジーパンにTシャツ姿の何処にでもいそうな子供が、今、おびえたような視線を自分達に向けている。

美味しくないって、どういう意味？ そう思いながらも言葉が出ない沙弥に、

「あの、もしかして旅の人ですか？」

少年が、何かに思い当たったように、そう尋ねた。

旅の人？ 旅行者って事？

「ああ、そうなんだ」

応えたのは、須藤隼人だ。

「ここにはちよつと立ち寄ってみたんだ。キミはこの人なのかな？」

何だか、わざとらしい口調だなと隼人を振り返る。青年の口元に浮かんだ笑みも、なんだか妙にわざとらしく映る。

もうひとりの連れ、白雪ミコトはただ食い入るように、少年を見つめていた。少年が僅かに顔を赤らめる。

（美人だもんね。白雪さん）

沙弥が小さく苦笑する。

まるつきり普通な少年の反応に、少し拍子抜けしたのだ。

本当に、異世界に迷い込んだのかとおびえていたさっきまでの自分が、なんだかひどく滑稽に思える。そんなこと、あるはずがないのに。

「違うよ。ここにはお使いに……」

ミコトから慌てて視線を隼人に向ける少年の表情が、不意に固まった。

じつと沙弥を その指先を見つめている。

そこにあるのは、先刻拾った琥珀色の珠。

「それ……！」

「な、なんです……か？」

駆け寄って来た少年に驚き、沙弥は二、三步後じさる。背中にかがぶつかった。須藤隼人だと気づき、慌ててその影に隠れる。

「この珠は君のもののかな？」

隼人の言葉に、少年が素直に頷いた。なんだか泣き出しそうな目で、沙弥と隼人を交互に見つめている。

「返してあげるのは構わないが、その前に君に幾つか質問したいことがあるんだけど、いいかい？」

勝手に決められても困るんだけどな。

などと思いつつもいつい、隼人の背に隠れてしまふ、沙弥。

「僕は須藤隼人と言うんだけど、君の名前は？」

少年は少し考えてから、

「田中明」

と、答える。

普通すぎる名前。普通すぎる、少年。

それが、沙弥には何故だか異様に思えてきた。

「さつき君が言っていた『僕美味しくないよ』ってどういう意味なのかな？教えてくれるかい？ それと、この珠は何なのかな？」

隼人の言葉に、少年は少し迷う。

「本当に、三人とも旅の人なんだよね」

じいつと、三人を見つめる、少年。沙弥が居心地の悪さを感じた頃。

「ここにはね、あの……お届け物を持って来たんだ。えっと、本当は別の場所に持って行く筈だったんだけど、やり方を間違えちゃって」

ちらつと、少年が茅の輪を見た。

「お兄さんたち、本当にただの旅の人だよね。誰かに頼まれたりしてないよね。だったら信じてもらえないかも知れないけど……」

少年は落ち着かなそうに周りを見回して、小声で告げた。

「ここはね、物の怪の領域なんだよ」

しんと静まりかえった境内に、少年の声は不気味に響いた。

具合が悪くなった青年にソファを進める女性の後ろ姿を見ながら、朝霞治は小さく首をひねった。

尾咲かえでという女性に対して、何かひっかかり 違和感を覚えるのだ。

「悪いな、こいつ体弱いんだよ。そういやここ、神社だろ。ここの神サマってどんなんだ？ 巫女さんなら知ってるよな」

青年のお連れが、そんな事を口にしたのが聞こえた。

尾咲がちらりと朝霞を振り返る。

「先ほど、あちらの方にも同じような事を尋ねられましたので、あちらで話しましょうか」

社務所には、バスの乗客全員が揃っていた。

この機会に、それぞれが自己紹介をする。

窓際のソファに座る、体調を崩した青年のお連れは上谷秋紀。やや離れた場所に座る美女は、ヨーコさん。体調を崩した青年に対しての紹介は、特になかった。本人がそれどころではないから、仕方がないのだろう。

そのヨーコさんに向かって、日野美智花が「あのお兄さん、どうかしたんですか？」と、心配そうな声をかけた。それに対して「平気平気。心配かけてごめんね」という、やけにドライな返事が返ってくる。

この三人組は、朝霞にとってはかなり謎だ。どういふ関係なのか、

想像がつかない。

奥の席にはお婆さんと高校生の谷川裕くん。彼等と背中合わせの位置に陽水咲季と美智花さん、フリーターの山田くん。その前には、カップルの鈴木さんと佐藤さんが座った。

テーブルの上には、尾咲の心づくしのお茶やフルーツ。そして朝霞が持つて来たクッキーなどが並んでいる。

朝霞が腰をかけたのは、入り口に近い席だった。榎木幸助と名乗った男性がその側、扉の柱にもたれるようにして立っている。

「では時間がありそうなので、このあたりの伝説をお話しますね」
尾咲かえでそう告げたのは、そんな折りだった。

「むかし、この地域には荒ぶる神が住んでおりました」
よく通る、澄んだ声が語り始める。

「この神様は気性こそ荒いのですが、たまには近隣の人々に大いなる恵みを与えてくれたので、人々は神様のご機嫌を取るようになっていました」

地元の人々にとっては、よく知っている話なのだろう。特に口を挟む者はいない。

「ある時、この神が近隣の村の娘に恋をしました。娘を自分に差し出すように村人に要求します。でも、娘には将来を誓った恋人がいました。 ありがちな話ですが、娘は恋人と一緒に駆け落ちをします。でも、二人はあっけなく村人に捕まり、ひどい折檻を受けました。そこに通りかかったのは、ひとりの英雄です。このあたりの荒ぶる神々を鎮めるのが、彼に課せられた使命でした。英雄は村人に話を聞き、『では、私とその荒ぶる神を退治しよう』と約束します。ひどい話ですよ。自分達の事しか考えていない村人も、一方の話しか聞かない英雄も」

かえでの話を聞きながら、陽水咲季が眉を寄せた。

何か、嫌な事でも思いだしたのだろうか。やけに険しい目をして
いる。

「英雄はたいそう強くて。神はついに、命ごいをしました。英雄は

それを認め、『それではこの土地の神となり、人々に繁栄をもたらすように』と約束をさせます。今までも、そうだった筈なんですけどね。そうして、荒ぶる神は土地神となり、英雄と共にこの神社に祀られております」

尾咲かえだが、言葉を切る。

周囲の沈黙に、朝霞は初めて気がついた。

話が退屈だったのだろうか、欠伸をする人が数人。カップルの女性や、お婆さんはすやすやと寝息を立てていた。

上谷秋紀も、眠そうにソファに横になってしまった。

いっぽう、依然として眉間に皺を寄せて固まっているのは、陽水
咲季。

「陽水さん、ここ」

朝霞はにっこりと笑って眉間を指さす。

「女の子がいるから。ね？ リラックス」

言われて、陽水もまた我に返ったように、表情を緩めた。

「あはは、すいません。ちょっと疲れてただけですから。でも、もう大丈夫ですよ」

素直なのが、彼の取り柄のひとつだろう。

朝霞はもう一度、陽水に笑みを向け、今度は尾咲かえでに向き直った。

「もめごとがある時に、第三者が入るとこじれるんですよ。恋愛感情が混じると、特に。当人同士で話をすれば、案外、複雑でも何でもない事だったりするんですけどね。その神様も、まず娘さんに好きだと告白するべきでしたね」

彼女の話の聞き、なんだか昔の伝説を聞いていると言うより、彼女自身が英雄や神、村人たちに対して含むものがある。そんな気がした。

「それで娘さんにあっさり振ってもらったら、こじれなかったのではないですかね……僕の妻なら、村人と神様をまず吹っ飛ばしていると思います」

自分の事は自分で始末をつける。カンナなら、英雄の申し出も「お構いなく。邪魔ですから」と、押しのけた事だろう。

「その娘さんにも、相手を脅迫してのけるぐらいの胆力があれば良かったのかもしれないね。自分だけではなく、恋人を守る為にも」
ちらりと、尾咲かえでを見る。

彼女は、小さく笑った。

「面白いことをおっしゃるんですね」

そう言って朝霞に視線を向ける。

「力がある者は、その力によって人を傷つける。力のない者は、その無力を訴えて他人を巻き込む。娘に神をはねつける勇気があったとしても、本当に神はその勇気を買ったのかどうかは、私には解りません」

遠い目だと、思った。

彼女はまるで、現実にも目の前で起こった事を物語っているような、そんな錯覚さえ覚える。

「怯えていたのでしょうか。誰も皆」

朝霞が告げる。

「村人は『理解できないもの』に怯え、暴力に走った。娘は『神』に怯え、逃げる事を選んだ。英雄も怯えていたと思いますよ。『己が常に正しい側にいる』と、『証明せねばならない』事への怯え。自分自身の影に追われて、外に倒すべき敵を見出そうとする。……」

現代にも良くいます。そういう人。『神』もね。怯えていたと思います。 どうして娘に直接、好きだと言えなかったのか。……振られるのが怖かったんじゃないですかね？ 意外と小心者だったのかもしれないよ、その神様。嫌われたくなくて、声がかけれなかった。自分に自信がなかったのかもしれないね。それで余計、空威張りする……自分を大きく見せようとして。かえって逆効果なのに気がつかない。単純なものですからね、男性は」

「随分、簡単におっしゃるんですね」

そう言って、彼女は小さく肩をすくめる。

「でも、無意味であつたとは思いません。何があつたとしても。そこから学ぶ者がいる。覚えている者は伝え、変化はそこから始まる。……僕は、人は幸せになる為に生まれてくるのだと思つています。人以外のどんな存在も、おそらくはそうでしょう。だから僕の店に来る人には、幸せを願つてほしい。うちの店で、お茶を飲む人には、あなたは、幸せを願つていきますか。自分自身の幸せを」

言葉が終わるまで、かえではじつと朝霞を見ていた。
「幸せ、ですか？」

一瞬、彼女の瞳が僅かに光つたような気がした。

彼女は笑顔のままだ。それなのに、朝霞は背筋に冷たいものが走るのを自覚した。

蛇に睨まれた、蛙？

そう、まるで闇の中で光る獣の眼を、連想させる。

「かえでさん。僕、娘がいるんですよ。可愛い子でね。宝物です、僕の。だから大切に育てています。でもね。悪さをした時には叱ります。お尻をたたきますよ。可哀そうでも、きつちり叱ります。そうしなければ、あの子が後で、大変な事になりますから。うちの子以外にも、そうしますね。悪さをした子がいたら、叱ります。……かえでさんは、どう思われますか？」

「あなたが正しいと思われて、なさる事でしょうか？ でしたら、それはあなたにとって正しい事なのだと思いますよ」

かえでは、いきなり朝霞に興味を失つたかのように、視線をそらせた。

先刻からたまにかえでを見ながら首を捻つていた高校生、谷川裕に歩み寄る。

「そういえば先ほど『この辺りでは人が消えるのか』と、そちらの朝霞さんがおっしゃられました。私は万が一にでも人が消えるなんていうことがあるなら、ものすごくおおごとだと思つのですが。あなたはそう思われませんか？」

「僕もその話には興味あるな」

陽水咲季も、その話題に加わる。

ふと、入り口付近に立つ人物がうつらうつらとしている事に気がついた。

そう言えば、先刻から眠そうにしていた人たちは、今は全員爆睡している。まともに起きているのは、朝霞と陽水咲季、谷川裕、日野美智花とヨーコと名乗った女性だけだ。

一息ついて眠くなったのだろうか、しかしいくら何でも立ったまま寝るのは、危ないのではないかな。

立ち上がり、朝霞はその青年に声をかけた。

「よろしければ、こちらにどうぞ」

朝霞に声をかけられ、立ったまま居眠りをしていた青年　榎木幸助がびくと顔を上げたと思うと、驚いたように周囲を見回した。「すみません、いきなり声をかけて。お疲れのようですし、座った方が良いですよ。ここにどうぞ」

「ああ、ありがとう。いきなり眠たくなっちゃって」
愛想笑いをしながら腰をかけると、榎木はやっぱり眠そうに机の上にはおづえをついている。

「聞いた話だと、昔からこの辺りは迷子というか、目的地になかなかつけないような事が結構あったみたいなんだってね。それはやっぱり、さっきの御伽話に出て来た神様だかの仕業だったりするのかな？」

やや後ろでは、陽水のそんな声が聞こえた。

「ちよつと待って下さい。そんなに簡単に人が消えるわけがないでしょう？　むしろ……」

対するかえでの声は、明らかに想像外の展開に、驚愕しているようだ。

「そういえば、さっきこんなものを見つけたんだけど心当たりないかしら？」

不意に榎木が顔を上げ、ポケットから小さなものをつまみ出す。

それは、突然だった。

窓の外から、眩しい閃光が差し込む。それは社務所全体を不気味に照らし出した。

それに数秒遅れて、轟音が響いた。

「ひゃあ！」

そう叫んで、隣に座る陽水咲季にしがみついたのは、美智花だ。

突然すぎる落雷に、がたがたと震えている。少女の恐怖を少しでも和らげようと、そちらに向かおうとした朝霞の視線の隅に、榎木に歩み寄るかえでの姿が映った。

「それ、よく見せて頂けますか？」

かえでが、右掌を差し出す。

「え、ええ……」

榎木もまた、いきなりの落雷にかなり肝を冷やしたようで、成されるままに手にしたそれを尾咲に渡した。

真珠のような色をした、珠。それを手に取る彼女の顔が、険しくなる。

気のせいだろうか。いきなりの落雷が、彼女の動揺を具現しているように、思えたのは。

荒ぶる神を祀る神社。その荒ぶる神とやらは、天候すらも意のままに操れるのではないかと。

「このあたりはさっきのような落雷は多いんですか？」

榎木幸助の言葉に、かえでは少し上の空気に「ええ。たまに、ありますわね」と答える。

「ちよつと、席を外しますね」

小さく首を振ると、少し慌てたように戸口に駆け寄る、尾咲かえで。

「かえでさん」

即座に、朝霞が駆け寄る。

「僕にもそれ、見せてもらえませんか？」

美智花さんの様子は気になるが、陽水が隣に居るから大丈夫だろ

う。それよりも、今はかえでの行動が妙に気になる。
先刻まではあんなに悠然と構えていた彼女の焦り、それが気にな
った。

「綺麗ですね。何なのですか、これは？」

振り返った彼女は、迷惑そうな顔を隠しもしなかった。

珠を朝霞に渡し、

「すみません。急ぎますので、説明は後ほど」

そう告げると、早足で部屋を出る。

朝霞は数秒だけ、考える。美智花のこと、他の乗客達のこと、そ
して母の家で待つあいりの事。

結論はすぐに出た。榎木にちいさく笑みを向け、

「僕が預かりますね」

珠を胸ポケットにしまう。

部屋を見回すと、すぐに陽水と目が合った。

「ちよつと行ってきますね。美智花さんはここにいますよ」

それに対する返事は聞かず、かえでの後を追う。

「……怒るべきなんですかね、僕は」

その口元から、そんな独り言が漏れた。

彼女が、悪い人間なのかどうかは、解っているつもりだった。で
も、もしも。

白いワンピースの後ろ姿を居っていた意識が、再びの稲光に逸れ
る。

次に視線を戻した場所に、かえでは居なかった。

見失った？ たった一瞬の事なのに。慌てて周囲を見回すとやや

離れた場所に立つ、白衣に緋袴の巫女の姿を見つける。

朝霞は眉を寄せる。

着替える暇は、無かった筈だ。

「乗せられておきますか。僕、平和主義者ですし」

巫女の姿を追いながら、朝霞はぼそりと呟いた。

聞かなければならない事が、随分ありそうだ。

静かに、そんな事を考える。

陽水さんと、ヨーコさん？ あの女性がいるなら向こうは大丈夫だろう。

そんな考えにたどり着き、小さく苦笑しながら首を振る。

「カンナに似てるんで、つい大丈夫と思ってしまっ。彼は普通の青年だ」

とりあえず、バズーカで神社を吹き飛ばす危険はないだろう。でも何かあったら、拳で語るぐらいはしそっだな。

そんな事を考える。

実は、朝霞は静かに憤っていた。

先ほどからふつつと、こみ上げて来る、怒り。

「遅くなったら、あいの所に戻るのが遅れるだろう！」

それを、八つ当たりと言う事ぐらいは、解っていたが。

巫女装束の女性は、本殿の裏にあるほこらの前に立っていた。

何をしているのかは、解らない。何かを呟いているようだが、雷鳴のおかげで声も全く聞き取れない。

やがて、彼女の手から一枚の紙切れのようなものが放たれた。

それは、蝶のようにひらひらと舞い、いずこかへと消えて行く。

それを目で追う、朝霞と。

「何か、御用ですか？ 朝霞さん」

そう言って振り返った女性は、やはり、尾咲かえでだった。

t e r n 3 荒ぶる神の社（前編）（後書き）

参加者の皆様、読んで下さっている方々。

長々とお待たせしてしまい、申し訳ありません。

そして、長々とお待たせしてしまったのに、やっぱり入り切りませんでした。

後編に続きます……。 （何をやってるんだろう、私）

tern3 荒ぶる神の社(中編)

話は少し遡る。

尾咲かえでが語る物語を聞きながら、上谷秋紀はとうてい我慢できないう眠気に襲われていた。

「こんな、ありがちな話を聞かされたせいだろう。」

正体不明の睡魔を、つまらない物語のせいだと勝手に解釈する。

「おい、死神」

小声でそつと囁くと、彼に取り憑く死神が静かに傍らに降り立った。もちろんその姿は、秋紀にしか見えない。

「なに？ 呼んだ？」

「ヨーコと人形とユウたちの様子見てる。オレは寝る」

ユウとレイは、同じように秋紀に取り憑いた子供の悪霊。昔から、色んなものを憑けているせいで、オカルト系の話は免疫がある。というか、聞き飽きている秋紀だった。

「無責任だね、人形フラフラなのに」

「人形は神隠しのケに当てられでもしたんじゃねーの？ とりあえずこんな眠い話、聞いてられるか」

ソファに身を横たえ、熟睡体勢を整える。

「英雄ねえ。それに『今までも、そうだった筈』か。ボクが説教でもしてこよーか？」

少し考える死神に、秋紀は「やめとけ」と手を振った。

「いらん世話焼くな。今は旅行中だ、テーマも休めるだけ休んどけ」「りょーかい。手は出さないし、口も出さない。何かあったら助け舟くらいは出したげるよ、一応『神』だしね」

「安らかな眠りでも与えてくれんのか？ 死神さん」

「それもいいんじゃない？」

「ぜってー殺されてやんねーよ。ど阿呆」

にっと笑って死神を小突く。死神もまた、笑っていた。

では、そろそろ本気で眠るかと思っていたら、

「ちよつと、アキちゃん。寝ててもいいの？」

再び、邪魔をされる。ヨーコだ。

寝入りばなに揺り起こされて、秋紀は不機嫌に重い瞼を半分だけ開ける。

「ここの主はいないんだろう？ だったら後で直に聞いた方が楽だし手っ取り早え」

「あらやだ聞いてたの。レディの話に聞き耳立てるなんて……アキちゃんたら、ぶ・す・い」

小首をかしげ、ヨーコが秋紀の鼻先をちよんちよんと突く。

「無粋で結構。そういや人形、もう起きられるか？」

「ごメンマスター。神隠し酔いきつくて……」

人形の声は、気をつけないと聞き取れないぐらいに小さく、かすれていた。

「ま、色んなものが混じっているみたいだからね」

そんな人形の額に手をやりながら、ヨーコがぼつりと呟く。

やっぱり何か知っていやがると、秋紀は改めて思う。だが、本人が語らないという事は話す気は全くないのだろう。

しかし、色んなものが混じっているって？

見回す秋紀の周りには、死神、亡霊、それにヨーコに人形。

まさか、ね。

秋紀はヨーコの手を引き、半ば強引に隣に座らせると、目を閉じた。

「結局なんにも聞かない？」

呆れたような声が降りかかってくる。

「聞きたいなら、お前が聞いとけ」

心の内にわき上がった不安のような何かを元の場所に押し込め、秋紀は眠りの世界へと身を投げた。いつでも眠りから覚められるように常に周囲の空気に気を配りながら……。

一方、陽水咲季は。

机の上に並んだ果物やクッキーに、満悦していた。丁度小腹もすいていた頃だ。こういう気遣いが有り難い。

さて。

尾咲かえでの話も、実に興味深いものだった。

よくある感じの御伽話かとも思う。でも、この類の 民話や伝承は、完全な創作ではない場合の方が多いのだ。本当に神様が居たということではなく、それに近い存在がいて、それが基になっている事が多い。

話を聞いた咲季の率直な感想は、「至極当然の結末」の一言に尽きる。

「神」は「英雄」に力及ばず敗北した。負けたからには、命令に従うのは当然の義務だ。弱肉強食。力の劣る敗者が、勝者に踏み躪られるのは昔からの道理。勝利を掴んだ者が、己の意を他者に強い、隷属させ従わせるのも当然の権利。

それに対してどんなに悔やもうとも、悲しもうとも、敗者には何をすることも出来ない。敗北した以上、神はこの話にあるように大人しく言う事を聞くしかないのだ。

そう。負けたのだから。

それは、村人にしたって同じ事。荒ぶる神の横暴に異議があるなら、力で神を倒せば良かった。たまたま、村人に代わってそれを行ってくれた英雄とやらの存在がなければ、村人たちは果たしてどうしていたのだろうか。考えるまでも、なさそうだ。

神が、もし本当に英雄の言い付けを不服に思うなら、復讐でも雪辱戦でも何でもやって、相手を倒し返せば良かった。そして命令を撥ね退けて、もう一度したいがままにすれば良かった。

ここで物語が終わっているのなら、この神様とやらはそれをしなかったんだらう。現状に満足してたのか、考え方を変えたのか、潔く全てを諦めたのか、どうなのかは知らないけど。でも英雄の言い

付けや敗者としての在り方に甘んじていたなら、彼には何も言う権利はない。肅々と命令に従うのが正しい姿勢だ。

だからこそ、この物語はあつて然るべき終わり方。そう思う。

敗者には、何を言う権利もない。

そうでなければ……

「陽水さん」

はっとして、声をかけられたほうを伺う。朝霞が、いつものように微笑みながら自分の眉間を指でつついていた。

「ここ。女の子がいるから。ね？ リラックス」

朝霞に指摘され、自分が考えすぎていることに、咲季は気づいた。若かりし頃　もちろん今でも若いのだが　今より少し、やんちゃだった頃に戻っていたようだ。

無意識のうちに、険しい顔をしていたのだろう。

「あはは、すいません。ちょっと疲れてただけですから。でも、もう大丈夫ですよ」

空気を吸い込んで、リラックスする。

気持ちを切り替えると、周りの人たちが眠そうにしているのが見えた。

お婆さんやカップルの佐藤さんたちはすっかり寝入っている。

「そういえば先ほど『この辺りでは人が消えるのか』と、そちらの朝霞さんがおっしゃられました。私は万が一にでも人が消えるなんていうことがあるなら、ものすごくおおごとだと思うのですが。あなたはその思われませんか？」

不意に、尾咲かえでが話の矛先を変えて来た。

話を向けられたのは、谷川裕と名乗った高校生だ。いきなり話を向けられ、戸惑ったような顔をしている。

「確かにそう思います。人が消えるとなればかなりの大事でしょう。しかし実際にそれが起きています。この辺り昔から人が消えるとかの話はありませんか？」

多分、思ったことをそのまま口に出したのであろう谷川裕の言葉

に、尾咲かえでは 咲紀にとっては意外な事に、驚愕の表情を見せた。

「おや？ と、咲季は小さく首を傾げる。

「聞いた話だと、昔からこの辺りは迷子というか、目的地になかなかつけないような事が結構あったみたいなんだってね。それはやっぱり、さっきの御伽話に出て来た神様だかの仕業だったりするのかな？」

口を挟んだら悪いかとは思ったが、咲紀も気になっていた事を口にする。

「ちよつと待つて下さい。そんなに簡単に人が消えるわけがないでしょう？ むしろ……」

明らかに彼女は驚き、戸惑っている。それが、逆に不思議だった。何故か咲季は、彼女のことを些細な事で感情を乱さないタイプだと思いきこんでいた。

「そういえば、さっきこんなものを見つけたんだけど……」
入り口付近から、別の声がかかる。

その時だ。

突然の、閃光。そして、耳をつんざく轟音。

隣に座る美智花ちゃんが、「ひゃあ」と叫んで咲季に抱きつく。

「美智花ちゃん、大丈夫？ 此処には皆居るから、ほら、怖がらなくてもいいよ。僕もビックリしちゃったから、同じだね」

そつと美智花の肩を叩き、頭を撫でて励ますと、美智花はがたがたと震えながらしがみついていた。

この子にとっては不幸の連続だなと、可哀想に思う。

しかし、ますますもって尋常じゃない事態だ。

お婆さんたちは、あんな轟音の後でもまだ眠っている。先刻までの青天からは想像もできない、にわか曇った空と、激しい落雷。まるで、神社に足を踏み入れた事で逆に不思議な空間に隔てられたようだ。

そんなことを考えていると、尾咲が全員に向けて一礼し、「ちよ

「つと失礼しますね」と言いながら出入り口に向かった。駆けつけた朝霞と扉の辺りで少し言葉を交わした後で、早足で出ていく。

悩むように社務所内を見た朝霞と、目が合った。

彼は咲紀と、その隣に座る美智花を見てその口元をそつと緩める。

「ちよつと行ってきますね。美智花さんはここにいますよ」

「神社の中でこういうのもなんですけど、気を付けて下さいね。なんていうか、色々と妙な事になってる感じですから。僕はそのまま居ますから、美智花ちゃんの事は御心配なく」

その背に声をかける、咲紀。だが朝霞は振り返ることもせず、部屋を出た。

気になりはしたが、今は心細そうにしている美智花ちゃんの側に居てあげる方が大事だ。

それに、どうせだからここいらで情報交換でもしておきたいし、と、咲季は改めて谷川裕に話しかける事にした。

「谷川君って言ったよね？　なんだか変な事になってきたみたいだけど、君はこの状況どう思う？　やっぱりオカルト的な力でも働いてるのかな？　僕はあんまり信じないタチなんだけど」

これだけ妙な出来事が重なると、流石にね。そう続いた咲季の言葉に、裕は小さく首を傾げた。

「うーん。僕もあんまりオカルトとかは信じません。でもこんな状況になると……」

何か気になることでもあるのか、彼の視線は出入り口の方を何度もちらちらと伺っている。

「何？　何か気になる事でも？」

「実は」と、裕が切り出した。

「さっきのバスの中で、ひとが消えるのを見たんです」

おやと、咲季が眉を上げる。

それは、新情報だ。

「白いワンピースを着た女性だったんです」

「白いワンピース？」と、えらく含みのある裕の言葉を反芻する。

「尾咲さんだったんじゃないかなって」

「それってつまり、バスが走ってる時に尾咲さんを見たって事かな？」

「多分」と、谷川裕が答える。これは、ますます面白い展開になってきたな。頭のどこかでそう考えて、咲季は苦笑した。

面白いと思うてる場合じゃないのに、なんだろう、どこかでわくわくしている自分がいる。

「それってどの辺りだったか覚えてる？ 僕等が降りたバス亭の近くだったら、彼女である可能性もあると思うけど。でももしもつと別の場所だったなら、きつと人違いだよ」

彼が見た「尾咲さんらしい人影」の場所とバス停までの距離は、けっこう重要だ。

だって、尾咲さんは自分たちがバスを降りてからほんの数分後にはあの階段の下に来ているのだから。

「君がその人を見た場所とバス亭までの距離を考えてみて。僕等がバス亭で留まっていた時間を差し引いたら、人間の脚で走行中のバスに追い付けたかどうか。無理そうなら、それは尾咲さんじゃないと。そうなるよね」

咲季に言われ、裕は少し考えるようなそぶりを見せる。

「バスを下ろされる、十五分くらい前だったかな。何気なく窓の外をみたら女の人が立っていて……」

「十五分？ 僕たちがバス停に居たのはほんの五分ほどだよ」

「うーん、そうですね。やっぱり違ったのかな」

この子も、自分が見間違えたなんてことは本当は納得してないんだろうな。と、咲季は思う。

でも、その人がいない場所でああだこうだと推測するのは、欠席裁判のような後味が悪い印象がある。

まさか幽霊って事は無いだろうが、やっぱり尾咲さんに直接聞いてみる他ないよね。正直に教えてくれるかどうかは別問題だけど。

そんな結論に達した時に、やっと気がついた。

美智花が、しきりに咲季の袖をひいているのだ。

「ああ、ごめんごめん。何かあったのかな？」

美智花の視線に促されて、窓の外を見る。激しい雨が、窓を叩いていた。

「ねえ、サキおにいちゃん。外にいる人たち雨で困ってるよね。尾咲のおねえさんに傘を借りて、一緒に探しに行こうよ」

「え？ 外の人達？ 電話が出来る場所を探しに行った人たちかな？」

咲季が思い出したのは、タクシーを呼ぶべく携帯の電波を探しに行った三人だ。彼等が尾咲さんに自分達が立ち往生をしていることを知らせてくれて、おかげで今も雨に遭うことなくここで休めているわけだ。

その三人が雨に遭っていたら、確かに気の毒だと思う。

「違うよ。ブタさんのぬいぐるみを持っていたおねえさんたち。きっと、この雨で困ってると思うの」

はっと、咲季は美智花と、そして裕を見た。

消えた三人。

その中でブタのぬいぐるみを抱えた少女は、確かに目立っていた。彼等の消息は、咲季も気になっていた。しかし、この落雷と雨の中を美智花を連れて当てもなく探すのはどうかと思う。

「僕も賛成だよ。外の人達は心配だもんね。でも……」

「でも、雷も鳴っているし、危ないよ」

すかさず、谷川裕からフォローが入る。

咲季は、少しほっとして美智花の頭を撫でる。

今、ここを離れるのはあまり得策ではない。ただでさえ人が消えているような状況だ。迂闊に動き回らない方がいいと思う。

「とりあえず、雷が止むまで待ってしよう。外にいた人が傘を持っているかもしれないし、どこかで雨宿りしてるかもしれない。もしかしたらここに向かっているかもね。だから今はここで待って外の天気がましになったら一緒に捜しに行こう」

咲季の言葉に、美智花も不承不承頷いた。

「うふふふ」という笑い声が社務所内に響いたのは、その時だ。ちよつと驚いてそちらを見ると、榎木幸助が楽しそうに笑っている。

気にはなつたが、何かを聞いて良い雰囲気ではないと　いや、何となく身の危険のようなものを察したので、忘れる事にした。

世の中には、いろんな人が居るのだと。あらためて咲季は思った。

「物の怪の領域」という少年の衝撃的な発言に、三人はとっさに反応することが出来なかつた。

須藤隼人は、「何の話だ」という顔をして小さく肩をすくめている。氷月沙弥は、例の珠を胸の前で握り込んでいた。

少年は、その沙弥が持つ珠をじいつと見つめながら、小さく溜息をついた。

「その珠は、これの一部なんだ」
ポケットから糸の切れた念珠のようなものが取り出される。

赤や緑、ピンクや茶色の珠は、先ほど沙弥が拾つたという琥珀色の珠と同じぐらいの大きさだ。確かにその一部だという事は、納得できる。

「間違つてココに来ちゃつた時に、いきなり糸が切れちゃつたんだ」
それを、しげしげと見つめている沙弥。

須藤隼人は他に気になることがあるのか、周囲を見回している。
「どうかなさいましたか？」

そつと、ミコトが尋ねる。
隼人は小さく首を振つた。

「いや、この神社の由来が書いたものがないかと思つただけだ」
ああ、と、ミコトは納得した。

「物の怪の領域」ですものね。と、心の中で少年の言葉を反芻する。

ミコトにとって、大切なのはそこだ。

いきなり「物の怪の領域」に迷い込んだと言われて、「だったら、どうすれば恋人の元に戻るのか」と、すぐに思った。今すぐにも会いたい相手なのに。あのままバスに乗っていたら、今頃会えているかも知れないのに。と、小さく唇を噛む。

そんなことを考えると、沙弥が手に持っていた琥珀色の珠を少年に返すのが見えた。

「その念珠って物の怪に効果があるの？ それに君は別の場所に行くはずだったと言ったよね」

「これを持っていたら、物の怪の世界に迷い込んで、絶対に戻れるんだよ。でも、まだいくつか足りないんだ……」

沙弥が、じつと少年を見ている。まるで、その動向に何か意味があるかのように。

ミコトもそれに倣った。

「ここは、どこ？」

沙弥の声は、少し震えている。

「徒歩以外に、帰れる方法はあるの？」

「旅の人なら」

と、少年は茅の輪を見た。

「茅の輪を、普通と逆にくぐるんだ。普通は、本殿に向かってくぐって左に回ってもう一度くぐって右に回るんだけど」

「この輪っかをくぐれば、帰れるの？」

沙弥は、じつと茅の輪を見つめている。触れようとして伸ばした手を、おびえるように引っ込めた。

氷月さんの気持ちは、なんとなく解るなど、ミコトも思う。

帰れると解っているなら、きつとミコトは躊躇わない。でも、もしもやり方が間違っていたら？ 実際にこの少年は、間違ってしまったと言っていた。

ミコトはおぶたさまをぎゅっと抱く。でも、おぶたさまからの答えはない。

おぶたさまは、自分で考えると申されておりますのね。

ミコトは、小さく頷いた。

「くぐり方を間違えた場合にはどうんあるのでしょうか？」

それが、一番大事だ。

これ以上、変なことになってしまったら。本当に戻れなくなるかもしれない。

そんな間に、須藤隼人は本殿の辺りを見に行っている。少しは、こちらの会話に参加してくれてもいいのにと、ミコトは小さく唇を噛んだ。

「旅の人なら、何かをきっかけに戻れるって言われているよ。世界の方が異物を……」

言いかけて、少年は不意に言いにくそうに口ごもった。

「とりあえず、比較的「道」が開きやすいんだ。でも、僕は……ここから帰れないと、後は又シにお願いするしかないんだって」

「又シ？」

思わず繰り返したミコト。

それをちらりと見た少年の目は、涙目になっていた。

「又シって？」

沙弥もまた、少年に詰め寄る。

彼の目から涙がこぼれた。

「又シは、又シだよ。迷い込んでしまった時には、正直に理由を話せて言われてるんだ。でも、又シは本当に気の荒い……」

泣き出した少年。

すると、それに反応したように、大地に陰りが落ちる。

空を見上げたミコトの目には、徐々に広がって行く雨雲が見えた。少年も、はつとしたように空を見上げる。

「ねえ、お願い。雨が降る前に一緒に探して！ あと四つある筈なんだ」

「そ、そんな事を言われても」

先刻から、ずっと落ち着きのない沙弥に、ミコトはおぶたさまを押しつけた。

押しつけられた沙弥は、呆然とミコトを見て、次におぶたさまを見る。

そう、落ち着きたい時にはおぶたさまを強く抱くと、落ち着けるのだ。少なくともミコトはそうだ。だから、他の人だって同じ筈。

それが、ミコトの考えだった。

「落ち着かれましたか？」

にっこりと笑うミコトに、沙弥も少し照れたように小さく笑った。

「ありがとうございます」

次に、少年におぶたさまを押しつけた。

少年もまた、いぶかしげにおぶたさまを見つめていたが、手触りが気に入ったのだろう。ぷにぷにと、いじっている。

「では、手分けしてその珠を探しませんか？ 氷月さんは先ほど、石段の下で拾ったとおっしゃられましたわよね？」

「え、ええ」

「どうした？」

不意に、隼人が合流してきた。

多分、こちらの様子をずっと気にかけていてくれたのだと知り、少し感心する。だからといって、必要以上のおしゃべりを、男性とするつもりはないのだが。

「ああ、この子が無くした珠と一緒に探そうって言っていたんです」
ミコトに代わって、沙弥が答えた。

簡単に説明され、隼人も納得したようだ。

「じゃあ、俺も一緒に探すよ。どこで無くしたんだって？」

少年が茅の輪を指さした。

「僕が、ここから出てきた時に、ばらばらになっちゃったんだ」

言われて、沙弥も隼人もその大きな茅の輪を見る。勿論、ミコトもだ。

では、この輪がやっぱり元の世界と繋がっているという事だろう。でも、少年はあの念珠が揃わないと帰れないらしい。だったらまずは一緒に珠を探してあげなければ。

「それはそうと、須藤さん。今まで何を？」

沙弥が、今、気づいたように問う。

「この神社の由来を書いた物がないかと探していたんだよ」

隼人の答えに、「それなら」と少年が手水場を指さした。

「あつちに、そんな事を書いたものがあつた筈だよ」

少年のその言葉に、ミコトの中にふと疑問がわき上がった。違和感というべきか。

だが、それは形になるまえに霧散した。

恋人の顔が、脳裏に浮かんだからだ。そう。早く珠を見つけて。

そして元の世界に帰らなければ。

隼人が「では、それだけ見てから探すのを手伝うよ」と手水場に向かった。

沙弥が「じゃあ、私はあちらを探しますね」と、茅の輪からさほど離れていない本殿に向かう。

本殿から階段にかけては、ゆるやかな傾斜がある。転がりやすいものなら、ここから階段に向けて転がっても不思議はない。

「では、わたくしは階段を探します」

そんなミコトの後に、少年が続く。三十段もある階段で捜し物をするなら、ひとりでは時間がかかる。

雲が、さらに広がった。

早く見つけなければ。ミコトにそんな焦りがあつたのは事実だった。

手すりのない、けっこう急な階段だ。捜し物をしていたので、足下の注意を怠った。

三十段ほどの階段の、数段目で。ミコトは足を滑らせた。

甲高い悲鳴が遠くで聞こえる。

こんなところで落ちたりしたら、大怪我するんじゃないでしょう

か……ミコト自身は、そんなことを考えていた。

大怪我どころの話ではない、という発想だけはない。

だって、わたくしにはおぶたさまがついていてくださるんだもの……。

そう考えて、ミコトは気がついた。それは今、彼女の手にはない。慌ててミコトに駆け寄った少年の手に、抱かれている。

おぶたさま。

どうしましょう。わたくし、死んでしまつかも……。どこか遠いところで、そんなことを考えた。

ミコトの身体が落下する直前。

何かがその軀を支える。

目に映った白い布を、ミコトはしっかりと握りしめる。

顔を上げたミコトに目に映ったのは、白衣と緋袴。一目で巫女であると感じる若い女性だった。結い上げた黒髪に映える、翡翠の髪留めが印象的だった。

「大丈夫ですか？」

その人が静かに告げる。

呆然としながら頷く、ミコト。

彼女を注視していたミコトは、気づかなかった。

田中明と名乗った少年が、彼女を見て恐れにも似た表情を浮かべた事を。

後編に続く

tern3 荒ぶる神の社（後編）

振り返ったかえでを、朝霞はじつと見つめていた。

「レモングラス」

初めて彼女を見た時に感じた、イメージ。それを口にする。レモングラスはイネ科のハーブだ。酸味はないが爽やかな香りがレモンのそれとよく似ている。

「職業柄、人を見るとその人に合ったお茶やお菓子を想像する癖があるんです。レモングラスが、あなたのイメージでした。なぜでしょうね。ヨーコさんとおっしゃるあの女性や、あなたを見てるとレモングラスが浮かぶんですよ。人の手の入らない、自然なままのハーブです」

「ヨーコさん」という名を聞いた時に、彼女は少し驚いたように朝霞を見る。

「尋ねたい事はたくさんあるし、事情の説明もいただきたいのですが。僕が怒りを覚えている事は、伝えておいた方が良いでしょうね。消えた人がいる。少なくとも二人以上。まだ若い方ばかりです。親を、恋人を、友人を、待たせている方ばかりでしょう。ここで彼らが消えたままになれば、誰かが嘆きます。子を待つ親から。愛する者を待つ相手から。親しい間柄の友人から。その嘆きを背負う覚悟が、あなたにはあるのですか？」

「それは」と、彼女の唇が動いたような気がした。だが、朝霞は溢れた言葉をそのまま彼女に向けて言い放つ。

ここで、変なごまかしはいらない。

「あなたはそんな事はないと、僕らの意識をそらそうとしました。けれど、それは起きている。起こってしまったのですよ」

自分で思った以上に、朝霞の口調は穏やかだった。

「あなたが全てを仕組んだのですか？ それならば、何か理由があるのか。答えていただきたい。ごまかしはなしで。何が起きてい

るのですか、ここで」

じつと、かえでは朝霞を見つめている。嘘をつかない目だと、朝霞は思った。

きつと彼女は悪人ではない。でも、一連の出来事に関係がないわけがない。

「答えていただけないのなら、僕は怒ります」

「どうして？」

朝霞を見つめていたかえでの目が、伏せられた。その口元が、小さく緩む。

「どうして、私が仕組んだと思われるんですか？」

一度、ちらりと祠を見やり、ひとつ首を振るともう一度、その視線を朝霞に戻す。

「確認いたしました。男性がひとり、女性がおふたり。彼らが自ら望んでこちらに移動したわけではないのなら、事故だと考えるべきでしょう。良くない条件がいくつか、重なりましたから」

なぞめいた言葉だった。

どうやって確認したのか、そもそも彼女は何なのか。

それを、追求するべきなのか、朝霞は少し悩む。

「あなたがどう思っておられるとしても、私たちは人に危害を加えるつもりもなければ、特に深く関わるつもりもありません。そうやって、ずっと保たれて来た、調和。それを無造作に壊すのはいつも、余所から来た旅人」

抑揚のない声で、かえでが告げる。

彼女は、「人」と「私たち」を分けて言った。それは、言い換えれば「私たち」は「人」ではないと言う事ではないのか？

だが、彼女が「何」であれ、自分の言葉を聞き、答えてくれていた。だったら、今はそれで良いと朝霞は思った。

「迷い込んだ旅人は、異端です。秩序が崩れる前に、あるべき場所に戻さなければなりません。だからといって私に、何か出来るわけでもないのですが。これで、あなたの質問への返答になったでしょ

うか？ 旅の方」

続いた自虐的な台詞と、あくまで無表情なかえでの容貌。

「それでもまだ言いがかりをつけられるなら、どうしてそう思われるのですか？」

朝霞は、小さく息を吐く。

「あなた自身がそう望んでいるから」

彼女は、眉を上げた。

「矛盾していますよ、かえでさん。あなたは最初から、人に対して侮りと嫌悪を抱いているような素振りを見せていた。隠しているよかったです、見る者が見ればわかります。それでいてあなたからはこの変化のない日々を、誰か破ってくれと。そう誰かに叫びたいというような思いも見えた。すぐりたいとでも言うかのように」

「よくもそこまで」

と、彼女が笑う。

「想像だけで、ものが言えるものですね」

呆れたような言い方に、朝霞は小さく笑う。

「ほら、そういう所。話のそらし方がぎこちなさすぎるんですよ。まるで、気がついてくれと言っていているようだった。……あなたは僕に、疑ってほしかった。そうすれば、傷つく事ができる。おろかな者だとさげすむ事で、自分の心から目をそらせる」

何故か、彼女は軽く額を抑えていた。

「僕はお茶をいれるぐらいしか、能のない男です。あなたがどういう立場にいるのか、どんな役割を担っているのかわかりません。何を背負っておられるのかも。でもこれだけはわかります。滞る水は腐りますよ。ご存知でしょう。旅人は、旅人であるからこそ、変化をもたらす。それもまた、調和の内のもの。……変化をなくしたものは、滅ぶ。あとは朽ちるばかりだ」

ポケットから例の真珠色の珠を取りだし、彼女の手を取る。

「必要な物ではないのですか？」

珠を握らせると、彼女は小さく頷いた。

「それで、あなたは何を望んでいたのですか。僕に、何を言ってほしかったのです。……どんな言葉が聞きたかったのですか。教えて下さい。この期に及んでまだ、はぐらかしたり、誤魔化そうとするようなら、本気で怒りますよ。娘が待っているのですね。早く帰ってやりたいんです」

かえでは、手に持った珠と朝霞を交互に見て、途方にくれたような顔をしていた。やがて、笑い出す。

失笑や苦笑ではない。愉快そうに、くすくすと。

「参りました」

もう、笑うしかない。そんな笑い方だと、朝霞は思った。何がそんなに、彼女のツボにはまったというのだろう。

「本場で、人生相談したくなってしまった」

黒い瞳が、朝霞を捕らえる。その目が怪しく輝いたのは、一瞬の事。

「初めて見たわ。こんな人間。「この子が欲しい」と言いたい所ですが、やめますね。あなたに人生相談は、却下です。すぐくばかばかしくなってきました」

小さく肩をすくめ、一度だけ空を見上げる。そのおもてに不安げな色が浮かんだのも、一瞬の事だった。

「かえでさん、はぐらかしはなしだと言いましたよね？」

「ええ。ですが時間がありませんので、社務所に戻りましょう。あなたにも力をお借りしなければなりません」

それは、彼女が社務所に居る面々に用がある事を意味する。自分が何をすれば良いのかも、きっとそこで聞けるだろう。

納得してかえでの後について行くと、思い出したように彼女が振り返った。

「朝霞さん、あなたのお子さまに、幸いある事を」

「あなたにも幸せがあるように。そう思ったのはホントです」

小首をかしげる、かえで。

「張ってばかりでは、どんな糸は切れてしまいますよ。のんびりし

たくなつたらうちの店にどうぞ。お茶を飲んで和んでいって下さい」「それは……」

言いかけて、彼女は小さく首を振った。

「大きなお世話です」

そう言った彼女の笑みは、きつと彼女にとって至上の笑みだと、朝霞は思った。

「手水場に、神社の由来が書いたものがある」。

少年の言葉に、「手水場」を見に行くと、なるほど確かに一枚の絵があつた。

三面六臂の化け物と、古代の鎧を纏った武者の姿が描かれている。絵で見えるのは正面を向いている鬼の顔、武者を見ている人の顔だけだが、書き添えられた言葉に「三面の」と見えるので三面なのだろう。

書き添えられた言葉は、てっとり早く言えば、「かつてこの国を支配していた、三面の貌を持つ荒ぶる神が、大和の国より訪れし英雄により成敗された」という内容だ。「荒ぶる神」とやらが、この化け物で「英雄」が武者なのだろう。

そして、化け物は国を守る土地神になり、この地域を守っているらしい。

どっちかと言えば、英雄の方が「神」なんじゃないのか？

そういう詳しい経緯は書かれていない。残念ながら、この「物の怪の領域」から抜け出せるヒントにはならないようだ。

仕方がない。約束通り少年の珠を探そうと、周囲を見回した隼人の目が、光るものを捕らえた。

近づいてみると、それは小さな祠だった。光っているのは、その中に収められた、鏡。

太陽に鏡が反射しただけかと、苦笑して真面目に珠を探そうと思

ったが。

「なんだか、違和感のようなものに捕らえられ、もう一度、鏡を見る。」

鏡に映るのは、鳥居。さっき自分達がぐぐった鳥居だ。振り返れば、やや左の位置に鳥居がある。鏡も鳥居に合わせてやや右に傾けられている。

傾いているからか？ それにしても、もう一度、位置を変えて鏡を見る。その時だ。

女の悲鳴が、静寂を破った。

氷月沙弥か、白雪ミコトのものだろう。隼人は慌てて、悲鳴の聞こえた方向に駆け出す。

そこには丁度、沙弥も駆けつけた所だった。では、悲鳴を上げたのはミコトの方か。てっきり何かあったのかと思ったのだが、本人が平気そうなので内心胸をなで下ろし、合流する。

近づく、すぐにもうひとりの存在に気がつく。

白衣に緋袴、そして翡翠の色の髪飾りがやけに目を惹く。

巫女の姿をしている、女。では、この神社の巫女か？ しかし、

あの少年はこの場所を「もののけの領域」だと言っていたが。

隼人は、うろんな視線を見知らぬ女に向ける。

「あの、おねえちゃん……」

田中明と名乗った少年が、その女に話しかけた。

何かに気づいたように、自分の手と周囲を見回している。

「本殿の階段の上にあったわよ」

と、苦笑しながら告げる、女。

「駄目でしょう？ 大事なものを置きっぱなしにしちゃ」

「だって、大事件があったんだ」

「そうみたいね」

そう言って、彼女は改めて三人を見回した。確認するように、小さく頷く。

「旅行者が三人。そういう事ですか」

歓迎されている風ではない。むしろ、迷惑そうだ。

「ここは、この世にあって人の世ではない場所。そこに迷い込むのは、いつも旅人。でも、あなた方は望んで来たようには見えませんか」

「そういうあなたは、望んで此処に来たような口振りだな」

状況の説明をするわけでも、自ら名乗るわけでもない女に、隼人はあきらかな不信感を抱いていた。

「私は、本来ここに在ってはならないものです。望んで来たのかと聞かれると、冗談じゃないと言いたい所ですが」

隼人らをどうするか、考えあぐねているかのように、女は少し考えた。ちらりと空を見上げ、眉を寄せる。

「皆さんがどういう意図でこちらに迷い込んだのか、どうしても確認する必要があったのでここに来ました。どうやら」

女は小さく息を吐き、少年を見る。

「思いがけない出来事が、重なったようです」

少年が小さく「ごめんなさい」と告げ、例のばらばらになった念珠を取り出す。

「やっぱり」

困ったように、女がもう一度嘆息した。

「あなたは、誰なのですか？」

やはり自己紹介をしようとしないうちに、その言葉を告げたのは、白雪ミコト。「ああ」と女が小さく呟く。

「その子の遠縁にあたる者です。この辺りはごくたまに混ざる事があるのですが……私がその子にお願いした事が事態を悪くさせたのかと思います、確認しに来ました」

少年が、しゅんと頂垂れる。

「あの」と、氷月沙弥が一步、足を踏み出した。

「あなたはこの世界について色々知っているようですけれど、今の私たちの状況をわかる範囲で説明してはいただけませんか？ それで、できれば帰る方法、とか……。それと、あなたはどのように私

たちが旅行者だと知っているのでしょうか？」

「ここは、この世にあつて人の世でない場所。結界に阻まれた場所と、言つても信じてもらえないかもしれないかもしれませんが。旅行者かどうかは、見れば解ります。たまに、自ら望んで迷い込んで来る迷惑な旅行者も居るのですが、あなた方はそうではないと判断しました」

なるほど、聞かれた事には答えてはくれるわけか。えらく上から目線だが。

と、隼人は思う。

女はしばらく考えていたようだが、やがて大きく息を吐いた。

「残念ながら、私にはあなたがたを元の世界に戻す術はありません。ただでさえ歪んでいるのに、四人も一度にととなると、どんな綻びが生じるのか、想像したくもありません。だから、自力で戻って頂ければと思います」

「それって」

氷月沙弥が乾いた声で言った。

「帰れないって事？」と、彼女の言葉は続くはずだったのだろうかと、隼人は思う。だが、沙弥はぶるんと首を振り、思い直したように女を見上げた。

「あの、あなたは私たちがいた世界にいらつしやつた方ですよ。ね。どのような方法でこちらに？ それにあなただけならば帰ることもできるのですか？ 巫女姿のようですが、もしかして神通力とか…」

「…」
「そこまで言つて、やや言葉を濁す。」

「そんな便利な力とか、あつたらつて、勝手な想像なんですけど」
しかし、それは出来ない、女はさつき言っていた。

隼人は、ますます女への不信感を募らせていた。

彼女が言つように自力で帰れるとしたら、その可能性が有るのはあの茅の輪なのだろう。

あの輪を逆にくぐれば帰れる可能性があると、あの少年は言った。だが、彼女の言つ綻びとやらが今いるこの世界を危ぶめているの

であれば、それで帰れると言う保証もないのだろう。第一、どのような仕組みになっているのか、綻びとやらがどう作用するのかが解らない状態で、その危険を冒すことは出来ない。

「それと、今までにも旅行者がいたみたいな口ぶりですが、その方々はどうやって帰ったのでしょうか？ 私たちもその方たちと同じ道をたどれば帰れるのでは？」

沙弥の言葉を背後に聞きながら、隼人はそつとその場を離れた。

自力で帰れとは どうやって迷い込んだのかも解らないし、大体あの巫女は遠縁の子供であるあの少年に責任があると言わなかったか？

隼人はそう思う。

幸い、聞きたい事は氷月さんが聞いてくれるようだ。後で話を聞かせて貰えば良い。

少年が少し前に言った「時間が無い」という言葉が少しひっかかるが、それも今考えていても、仕方がない。

少年の事は、あの巫女さんに任せておけば何とかしてくれるようだし、だったら自分は気になっていた事を解決させようと、隼人は思う。

先ほどの祠に近づき、もう一度鏡を見る。

映っているのは、やはり鳥居。

今度こそ、違和感の正体が解った。

振り返ると、鳥居前に四人の人間が居る。氷月沙弥、白雪ミコト、少年、そして巫女。それが鏡に映っていないのだ。

そして鏡に近づいた隼人の姿も。

その上、風景もやや違ってきている。この鏡に映っている空は曇天で、しかもたまに稲光のようなものが映る。

見上げると、確かにバスを降りた直後と比べると空はやや曇ってきてはいるが、雷を起こすような雲までは出ていない。

不思議に思い、隼人は鏡を手に取る。

不意に、鏡に映る景色が歪んだ。と、思うと全然別の景色が映し出される。

それは、どこかの室内だった。同じバスに乗っていた乗客たちが、椅子に腰をかけている。寝ている者も居るが、起きている者の視線を辿ると　と、隼人が思うとその映像がややずれて、彼らの視線の先にひとりの巫女の姿が映る。

ちらりと、隼人が鳥居を振り返る。そう、あそこに居る巫女と、着ているものも、顔も同じ。違うのは、髪型のみだ。

鏡に映っている方は、長い髪を垂らしているが、あそこに立っているのは髪を結って髪飾りで止めている。

あちらの世界を写しているのか？　声は届くのか？

隼人は鏡に耳を近づけるが、残念ながら音声は聞こえて来なかった。呼びかけても映像に変化はないので、こちらの声も届いていないようだ。

これは、何だ？

鏡が祀られていた祠を見ると、「水明鏡」という文字が書かれていた。

鏡を裏返すと、かすれが文字が見えた。「映るもの即ち」「覗」「心」などという文字が読みとれるが、ひどくかすれている上に達筆すぎて全体を読みとる事は出来ない。

呆然と鏡を見つめっていると、足音が聞こえた。

振り返ると、あの少年が隼人の後ろを通り過ぎて本殿の裏に駆け込む姿が見えた。

「今までにも旅行者がいたみたいなの口ぶりですが、その方々はどうかやって帰ったのでしょうか？　私たちもその方たちと同じ道をたどれば帰れるのでは？」

沙弥は、諦めきれずに巫女姿の女性に問いかける。

この人は、知っている。バスの中で見た。

そう、通り過ぎる風景の中に立っていて、そして不意に消えた人。

あの時は、幽霊かと思った。でも、またこの異世界で会うのなら、不思議な力を持っている人だと思って良い筈だ。

「ここは、結界によって切り離された場所なのです。だから、私も実体を送り込む事は出来ません。この姿は、影のようなものです。ですから、あなた方を元の世界に戻すことは、私には出来ません」

「そうだったんだ」

と、呟いたのは少年。

「迷い込んだ旅行者は、結界に拒絶され、少しずつ元の世界に戻るといのが常でした。ですが、悪い条件が重なって……」

そういえば、「旅人」は何らかの拍子にもとの世界に戻れると、その少年も言っていた。

だが、今回は何が違うのだろうか？

「あきらくん」

呼ばれて、少年は彼の遠縁だと名乗った女性を見上げる。

「間違えたわけじゃ、ないでしょ？」

少年の動きが、止まった。

女は膝をついた。目の位置を少年に合わせ、彼の目を覗き込む。

「わざと、でしょう？」

じつと女性を見つめていた明少年が、いきなり顔を背けた。

そして、社殿に向かって走り去る。

「ああ！」

と、はじかれたようにその後を追ったのは、ミコトだ。

巫女の方は少年の行動に意表をつかれたように、立ちつくしている。

少年とミコトの姿が視界から消える前に、沙弥も慌ててその後を追った。

この不審な女性と、ふたりきりになるのが不安だったからだ。

沙弥が二人に追いついたのは、社殿の裏。

ミコトが少年をお願いをして、ブタのぬいぐるみを返してもらっている。

「おぶたさまあああ」

と、ぬいぐるみを抱きしめる、ミコト。

貴女が追ったのは少年ではなくて、ぶたさんだったのねと、沙弥は苦笑した。

「ごめんなさい」

少年が、小さな声で呟く。

「え？　どうかなさいました？」

「おぶたさま」を無事取り戻したミコトがやっと、少年に尋ねる。走ったばかりで、まだ息は乱れていたが。

「ぼく、お姉ちゃんにどこにも行って欲しくなかったんだ。だから、道に迷ったら、お姉ちゃんが追いかけて来てくれるかなって思ったんだ。でも、僕のせいで、おねえさんやおにいさんが、か、帰れなくなっちゃって……」

再び泣き出す少年に、沙弥は正直うんざりしていた。相手は子供なのだからと思う自分と、男の子がぐじぐじ泣くな！　と叱咤したくなる自分が同時に居る。

「わざと、迷ったの？　どうやって？　それに、きみは帰れる自信があつたの？」

沙弥の声は、自分が思った以上に棘があつた。

「お姉さん、どこかに行かれるのですか？」

反して、ミコトはいつものおっとり丁寧口調。

沙弥は、少しほっとした。

「あの念珠が壊れるなんて、思っていなかったんだ。僕のこと、守ってくれるって聞いていたから。だから、安心して……ついて行っちゃだめだって言われたモノに、ついて行ってしまったんだ」

「だったら」

背後から、別の声がかかる。

やっと追いついた巫女姿のあの女性が、そこに立っていた。

「やり直さなければね」

そう言って、女性は二人を見つめる。

「先ほども言いました。私にはあなた方を元の世界に戻す力はありません。だから、誰かの協力が必要になります」

まだ、たまに光っている窓の外をたまに見ながら、美智花はやがてうつらうつらとしていた。

お菓子でお腹もふくれ、気持ちもいつか落ち着いていた。隣に座る陽水にもたれ、目をつむる。

どれぐらい時間がたっただろう。

話し声と、なんだか緊張したような空気に、目を覚ます。

いつの間にか、朝霞とかえでが戻っていた。かえでの方は、先ほどまでと服装が違う。白い着物と赤いハカマっていうのだろうか。お正月に初詣に行く神社の巫女さんが着ている服装だ。

何で着替えたのかな？ 不思議に思いつつ、美智花は他の人たちの会話を聞くとともに聞いていた。

「あなたを見かけた時、私は人を捜していました。私が頼んだ用事で出かけた子供から、連絡がないので」

かえでの言葉は、裕に向けられたものだ。

「今日が日が良くないので心配していましたが、どうやら心配した通りになったようです」

「今日って、大安じゃなかったかしら」

と、呟いたのは榎木幸助。思い出したように、朝霞に向かって右手を差し出す。

「そうそう、さっきの珠なんだけど、そろそろ返してくださいさる？」

「すみません。あれは、かえでさんに渡しました。神社……の関係者の方の物のようです。彼女に渡しておくのが順当かなという気がして」

朝霞治はそう答え、かえでに笑みを向ける。朝霞のおじさんらしい優しそうな笑顔だなと、美智花は思った。

さつきまでとは、全然違う。二人でどこかに行っていたけど、何があっただらう。

「これは、その時にその子が持たせたお守りの一部です」

かえでが、小さな珠のようなものを袖口から取りだした。

「元は一連の数珠だったのですが、それが壊れてしまい、その子はさきほどそちらの方が言っておられた「神隠し」という言葉に似た状態に会った」

「そちらの方」のところで、かえでは陽水咲季を見た。

美智花もつられて隣に座る咲季を見る。

「推測でしかないのですが。ばらばらになった数珠はもう一度ひとつになるうとして、たまたま、側に居った力……「人」を呼び寄せたのではないかと、それが、皆さんが言う消えた人達なのではないかと、思います」

かえでの話は難しく、寝ぼけている美智花には理解できない。

でも、誰かがゆくえふめいになっちゃったのだなと、何となくそう思った。

「私があの子に頼まなければ、こんな事にはならなかった。そういう意味では、私が元凶なのでしょうが」

そう言つて、かえでは窓の外を見る。同じようにそちらを見た美智花の目には、やはりたまにゴロゴロしている空が見えた。

「私は、ここから離れる事が出来ません。そして、迷い人は絶対に」

「今度は、隣に居る朝霞を見た。」

「待っている人の元へ、送り届けなければならぬと思います」

小さく頷いた、朝霞。

「力を貸して頂けませんか？」

「僕はいいですよ。尾咲さん一人じゃどうにもならなさそうですし、最初に答えたのは、谷川裕。」

「困った時はお互い様。こんな時は助け合つて、困難を乗り切るのもいいと思う。僕で何か役に立てるなら、喜んで協力させて貰うよ」

続いて、陽水が答える。

「別に構いませんよ。ところで私はなにをすれば良いのかしら？」
榎木もまた、頷く。

「お手伝いします」

朝霞が、そつとかえでの肩を叩く。

「面白くなってきたな」

後ろでそんな声が聞こえて、美智花は振り返った。

さつきまで眠っていた人が、大きく伸

「巻き込まれたんだったらもうタルいとか言ってられんな。ヒロとかカマイ奴とか知り合ったやつもいることだし乗り掛かった船が沈まれても困る」

その人の周りに、なんだか別の人影が見えたみたいなのだけど。

それはすぐに見えなくなったので、目の錯覚なんだと美智花は思った。

解らないけど、みんなでどこかに行くのかな？

「あの、私も」

みんながどこかに行くのなら、美智花も行きたい。

他の人たちはみんな寝ちゃってるし、まだお外はたまにゴロゴロしている。残されちゃうのは、怖い。

「私も行きます」

最後に美智花が言うと、尾咲かえでは笑った。

「ありがとう」

「あたしは、行かない。それで良いのよね？」

美智花が最後ではなかった。

後ろで寝ていたお兄さん　上谷秋紀のお友達のおねえさんが、

そう言う。

「申し訳ないのですが」

と、かえでが言う。

「あーあ、面白そうなのになあ」

そんな言葉を聞きながら。

美智花はさっきまで夢にみていたおじいちゃんの顔を思い出す。
美智花、もうすぐおじいちゃんの墓、食べに行くからね。

t e r n 3 荒ぶる神の社（後編）（後書き）

大変に、苦戦いたしました。

参加者の皆様、本当に申し訳ありませんでした。

多分、これで繋がってくれたと思います。

途中、ハツタリぶっこいてるかもしれません。

いえ、ぶっこいています。（ちよつとだけね）

だって、皆様のキャラクターがキョーレツで。

素で書くのが無理だった……。 （すみません、すみません）

後は。（あとは）

ラストにむけて（むけて）

皆様、どうか力を貸してください。（お願い）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7973g/>

青天の霹靂

2010年10月14日12時05分発行